

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

第七十六卷 第十一号 日本幼稚園協会

# 11



*Magase*



## ■保育実技シリーズ

⑩みんなのあそび12か月……………上田順子著

—うた・おどり・リズム編—

「保育専科」に連載して好評をいただきましたものを取りまとめ、さらに新しい遊びなどつけ加えました。子ども同士、あるいは子どもと先生同士、肌であたかみを感じられるような、うたったり、おどったり、スキップしたりなどの遊びを紹介しています。

⑪リズムであそぼう……………中村 明・早川史郎共著

季節ごとの子どもの保育行事に関連した曲を採りあげて、特にリズム感の育成に重点をおいて、一曲ごとに詳細に振りつけ等の解説をしています。

⑫保育のための人形劇……………山本駿次郎著

保育にもっと自然に、もっと豊富に、人形を利用することを考えて欲しいと訴え、ギニョール、マリオネット、シルエット、紙人形等の使い方、人形劇への発展のさせ方、単純な脚本から複雑な脚本など、初心者にもわかりやすく解説しています。

各1,000円

★★

## ■フレーベル新書

⑬続ひとくち童話……………東 君平著 550円

好評のひとくち童話の続編です。登場するのは、げんきなおとこのこ、ちいさなおんなのこ、おこりんぼのおとうさん、やさしいおかあさん、それに、ねこやいぬも登場する楽しいお話しがいっぱいです。

⑭幼児のゲーム……………まき・ごろう著

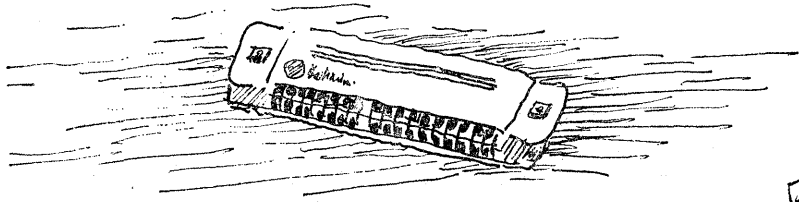
《自由な遊びから劇遊びへ》 550円

園庭で、あるいは遊戯場で、子どもたちが自然発生的に始めた遊びを上手にとらえて、次第に大きく、そして複雑な劇遊びに発展させていく数々の事例を、系統的に紹介しています。

# 幼児の教育

第七十六卷 第十一号





天谷

# 幼児の教育 目次

——第七十六卷 十一月号——

© 1977  
日本幼稚園協会

表紙 永瀬義郎

(「こども」)

カット 中島英子

幼児教育第二世紀を迎えて……………河辺 果……………(4)

人でつづる保育史 飯島半十郎の生涯と思想(その三)……………小林 恵子……………(8)

私の保育……………宮下美智代……………(15)

ひとりひとりの子どもを見つめて ⑦……………赤羽美代子……………(22)

米国の幼児教育における五つの実験(十四)……………大戸美也子……………(26)



アメリカにおけるオープン・エデュケーション(その二)……………白井 堯子…(33)

へい・かべ……………村田 修子…(40)

★倉橋賞受賞論文★

乳幼児期の遊びの研究

——特に三歳未満児の遊びについて……………和多美知子…(42)

児童園芸学 秋の宝石——いろいろな実……………皆川美恵子…(46)

図書紹介……………津守 真…(50)

明日の保育を考える

——親と子と保育者との出会いをめぐって……………小泉 庸子…(52)

史料紹介『桑名日記・柏崎日記』(その三)……………松川由紀子…(57)

# 幼児教育第二世紀を迎えて

— 保育者にいま・ここで必要なるもの —

河 辺

杲 あきら

それは「自己」に直面できる経験

近年幼児教育に関する研修の機会がとみに多くなり、保育者がこれを選んで参加できるようになって来たことは喜ばしいことである。

数年前までは夏期休暇等を利用して開催される民間団体等主催の研修会の多くは、二期の運動会等の教材を中心に実施されていたが、近年は音楽リズム等の教材研究に加うるに一般教養的な内容を考慮し、保育者の心情を少しでも豊かにという企画が見られるようになって来ている。中には二泊三日という、宿泊して講師を中心の討議を主体とする研究会も企画され、そこでは保育者の心構え等が問題にされて来ている。

こうした研修会の動向は、教育行政機関において企画されて来た研修会が、ある形式を



もって実施されて来ていることに対する形式打破の風潮のようにも受けとれると共に、一方、保育者の本質的条件にもっと迫ろうとする時代の要請に応えようとする動向とも考えられる。

しかしこれらのいずれかの研修会に参加し、受講した保育者の多くが、新しい知識やその指導技術を得ても、それが保育実践の改善にはどうも一時的、部分的なものとなり得ても、なにか基本的な保育姿勢の改善にはなお程遠いようである。このことは、受講者にアンケート等で数量的統計をした結果のものではないにしても、数多くの参加者の述懐等や、研修後の保育実践の研究会等の裏づけからも、先分言い得るのである。

これは保育研修と保育実践のつながりの困難さ、すなわち保育研修の限界等を物語るものなのか。それとも保育研修になにか基本的な側面が欠けているものなのか。種々論議のあるところと思うが、私は後者にあり、なお検討の余地のあることをここに提起したいのである。

もちろんこれから述べる基本的な保育者の心を課題とする研修は、一日や二日の研修日程や、講話を中心とする研修方法にも限界があることは論をまたない。

ところで保育実践の姿勢の基本的な改善は、とりもなおさず、“自己に直面できる経験”をもったかどうかということである。すくなくとも従来から実施されて来ている教材の伝達や指導技術の講習会、講演を中心とする研修会や、実践事例をもちよつての研究協議形式の研究会等では、とても保育者が自己に直面することは不可能に近いものと思う。それ



は、その研修会が少なくとも指導者と受講者の関係において、指導者は「教えてやろう」「……させよう」という姿勢であり、受講者は全く受身の立場に立っているからである。これは受講者、研修者が自己に直面できるような雰囲気でもないし、指導者（企画者を含む）と研修者の人間関係が、援助者と主体的な学習者との関係になっていないからである。（このことは、講演や教材指導技術の伝達を駄目だと否定しているのではない。それはそれなりの意味をもち、それなりの限界があることを認知しなければならない。）

例えば「自発性（私は「おのずから発するもの」「自然発生」と主張して来ている）を育てるのだ」と言っている保育者が、グループ活動を通して「私と自発性」について経験することである。また「保育者や友だちの話を正しくきくことを教えるべきだ」と言っている保育者自身が、グループ活動の中でどれだけメンバーの話が聞けるのか（単に内容のみをきくだけでなく、その人の気持ちにふれて聴くことができるか）、また保育者自身が自分のいま・ここで感じていることが他人にうまく伝えられるのかを体験することである。このことができることによって、保育者は「幼児に即く」ことができるようになるのである。

このような、人間として最も基本となるべきこと（センシビリティ＝感受性など）が自己訓練され、自覚されないで、保育技術や指導方法を論じているために——自己に直面する体験がないために——数多くの研修に数多く出席し研修しても、保育実践が基本的に改善されていないことに、保育者自身が気づくべきであろうし、そうした研修会を選ぶべきであろう。また教育行政機関は当然、折角の民間各種団体でこれを企画される場合に、こうした保育者が自己に直面できるような経験を加えた研修を工夫配慮してほしいも

のである。

ここに道元禅師のことばを付記したい。

「自己をはこびて方法を修証するは迷いなり。

方法きたりて自己を修証するは悟りなり。」

私は保育者に禅の境地までを期待しようとしているのではない。現在の研修では保育実践の基本的な姿勢の改善は望めないし、「保育の心」も把握できないと思うようになって来たので、この方向への着眼と努力を望みたいし、これを現実化していかなくは、幼児教育第二世紀の課題に応え得ないと思うのである。

(付記 このことに強い関心をもたれる方があれば、私の若干の体験的資料もあり、共同研究できれば幸いと思えます。(連絡をお待ちします。)

(洗足学園短期大学)

\*

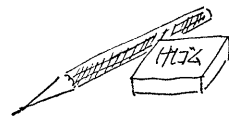
\*

\*

# 飯島半十郎の生涯と思想（その三）

『幼稚園初歩』の著者——

小林 恵子



## （八）「洋々社談」の編集

「東京新報」について彼が編集者となって活躍した雑誌に「洋々社談」がある。「洋々社談」は明治八年四月から十六年三月にかけて第九十五号に及んだ月刊雑誌で、第七十二号までの奥付に「編輯兼印刷人飯島半十郎」と記されている。次号以下は岡敬孝となっており、その事情はあきらかでないが、最後の号となった第九十五号に社員人名が掲載され、半十郎の名前が記されている。社員の名前は文部省編集局の西村茂樹、木村正<sup>(1)</sup>、東京帝国大学教授の那珂通世、黒川真頼、小中村清矩など新進の洋学者たちが名前を連ねている。「洋々社」は明治八年、

こうした文部省や大学関係の学者が中心となって形成されたもので、毎月一回、上野の不忍池畔の長蛇亭で会合をもち、月刊雑誌「洋々社談」を刊行した。

明治七年二月から八年十一月まで第四十三号で終った学術団体明六社の機関誌「明六雑誌」は、国民の知識の啓蒙を目的としたが、「洋々社談」も広く知識を世界に求め、洋々の楽しみを読者と共にわかちあうことを目的としたものであった。これは「明六雑誌」の廃刊の年に創刊されており、西村茂樹は両雑誌に関係した人であった。「洋々社」の会合に集まった学者の多くは、四、五十歳を過ぎており、創刊の頃三十五歳であった半十郎は若い方であった。ここで彼は多くの知友を得た。特に晩年まで親しくしたのは彼より年若かった大槻啓溪の長男、如電



および次男の文彦である。彼の辞世の句「主もなく、おやもなき身の楽寝哉」を代筆したのは如電であった。如電は「日本洋学編年史」を、文彦は国語辞典「言海」を出版した。この他「古事類苑」を編纂した小中村清矩、那珂通高などとも親交深く、小中村は「幼稚園初歩」の序文を中村正直の漢詩の次にかな文字で記している。

こうした学者の多くは幕臣で、早くから洋学を学んだ漢学者たちであった。小中村清矩は三十五号で「社談会集の記」と題し、洋々社談について「此社談は、おの／＼何事にまれ、つゝみあへすうち出して心ゆくをうへなかつたのしとするは、あながちにをりにあわせんとし時にそむかづとして世にはめられんとはあらづかし、まして彼品のごとく、よき価をもとめて、うらんとしも思へらづ」と述べ編集者半十郎の姿勢を記している。雑誌の内容は多岐にわたり、西村茂樹の「人口論」「男女同権説」大槻文彦の「印刷術ノ史」伊藤圭介の「日本植物図説序」などその範囲は広く諸外国に及んでいる。半十郎の書いた題材は十五で、この中には後年の浮世絵と関係のある娼妓フミの話や柳橋での大食会の話など、学術的な論文にまじって江戸の情緒を描いた作品も面白い。

この雑誌は朝野新聞社をはじめ、東京、大阪の十数か所が売

捌所となっており、文明開化の時代にあつて知識人たちの間で読まれたようだが、発行部数はあきらかでない。発行所ともなつた「朝野新聞社」は彼の騎兵時代の上官、成島柳北が経営している新聞社であり、同じ幕臣として、ジャーナリストとして、成島の援助や指導があつたものと推測される。

#### (九) 文部省、山林局の御雇

この春、飯島家宅を訪問した折、私は彼の遺品の中に二枚の

文部省及山林局の御雇の証書

飯島半十郎

飯島半十郎

報告課<sup>エ</sup>雇入一月山林局御雇申付  
金二十五圓相渡候事 月給金貳拾圓給  
明治八年三月十日 興候事  
明治十二年六月十日

文部省 山林局

証書を見いだした。一枚は文部省、他は山林局のものである。

彼が文部省の教科書編纂に関係していたことは数多くの教科書によってあきらかであっても、その職名は不明であった。私の調査した限りでは、官吏職の名簿から彼の名を探すことは不可能であった。成島柳北は幕府瓦解の後は下野して新政府に仕えなかったが、彼もまた官途につくことはできるだけ避けていたと考えられる。

別号「局外閑人」も彼の生き方を示している。天保、文久と江戸時代に育つて明治維新を迎えた旧幕の遺臣たちは、新政府に對しきわめて客観的なさめた見かたをしていたと言われる。

言いかえれば、負け犬として彼らはできるだけ官途と関係のない分野で、文筆や学問、研究、宗教、趣味の世界に独自の生き方を求めており、浮世絵研究に打ちこんだ彼もまたその一人であった。二枚の証書は、いずれも御雇として何等かの仕事の委託を受けたもので、文部省の方は、数々の教科書の編纂で長期にわたったが、山林局は凡そ一か年に過ぎない。明治十二年五月、内務省に山林局が設置され「山林法ノ設立」のため日本各地の山林に関する沿革を調査することが急務となった。このときの局長、桜井の「山林局務引継書」<sup>(3)</sup>には次のように記されている。

「木曾諸山ハ本邦第一ノ名山ナルヲ以テ特ニ飯島半十郎ヲ派出シテ之ヲ調査セシメタリ、半十郎前日帰京草按ヲ示シタリ遠カラスシテ淨写具上スルナルヘシ」

こうして彼は、明治十二年から山林局の御雇として「木曾沿革史」を作成した。二冊からなる「木曾沿革史」は出版には至らなかったが、翌年六月二十六日、明治天皇が同方面を御巡幸の折、車駕福島駅に到着した時、蘇山伐木図二巻に此の書を添えて天覧に供えたとの事で、今もなお帝室に納本してあると言<sup>(4)</sup>う。

以上のことから推測されるように、一時的な御雇とは言っても、飯島の仕事はかなり高く評価されていたことが理解される。そして二枚の証書から感じられることは、月給が高いと言<sup>(5)</sup>うことである。明治初年、米一石の正米相場は四〜五円内外であったから、一か月金二十五円（文部省）二十円（山林局）はかなり高額であったと言えよう。

興味ぶかいことに、半十郎が御雇となった山林局に、東京女子師範学校附属幼稚園の主任となったドイツ人松野クララの夫、松野崎<sup>はまざき</sup>が勤務していたことである。松野は明治十五年山林学校々長となり、我が国の林学に尽力した人で、独逸林学を学んだ最初の人である。半十郎がこの松野と親交があったかどうか

かは明らかでない。しかしジャーナリストでもあり教育界に通じていた半十郎は、松野潤、クララの事はおそらく知っていたに違いない。

### (十) 幼児教育に関する著書

彼が文部省報告課に御雇となつて数多くの教科書を編纂したことは一覽表として(その一)ですでに掲載したので参照していただきたい。その後、また新しく彼の作品を見つけた。

「日本暗射地図符合解」(文部省刊明・10・4)である。ほかに校として「暗射図符号解」(文部省刊明・9・4)があり、これは久保讓次編 内田正雄閱 飯島半十郎校となつている。このように彼の手がけた仕事は今後もまだ発掘される可能性があるが、地理、物理、道徳、歴史、教育と多岐に及ぶ数々の著書に驚かざるを得ない。

彼が文部省の御雇として手がけた最初の仕事は、「幼稚園」の校であり、年代順に幼児教育関係の文献を記すと次の書がある。

★「幼稚園」ロンゲ著 桑田親五訳

巻上 稲垣千頰、那珂通高校

巻中 那珂道高、飯島半十郎校

巻下 飯島半十郎校

(巻上・中は明治九年一月刊、巻下は同十一年六月・文部省刊)

省刊)

★「加爾均氏庶物指数」カルキン著

黒沢寿任訳 飯島半十郎校

明治十年 文部省刊

★「幼稚園初歩」飯島半十郎著

明治十八年 青海堂

★「幼稚智恵のみちひき」上、下 飯島半十郎著

明治十八年 修静館

この他、幼児教育について多少なりとも関係のあるものとして次の書がある。

★「初学家事経済書」上、下 飯島半十郎編集

明治十五年 虚心堂、尚友堂

★「家事経済書」飯島半十郎編集

明治二十三年 東京博文館

この「初学家事経済書」は女子小学高等科第八学年教科書用に書かれたものである。「家事経済書」には「傳婢へ云渡すべき条件」「吉田松陰先生の家庭教訓」などが記され「善悪娘の



比較」がなされ「女に五つ文字」として清、貞、美、閑、胎をあげている。清は礼儀、みだしなみ。貞は操。美は心の美しさ。閑はものしずか。胎は氏、素性の正しいことをさしている。こうした「家事経済書」を読むと彼が儒教的な考え方に基づいて欧米の合理的な家事方法を折衷させようとしていることが理解できる。彼は我が国古来の生活の知恵を大切にして、先輩の説を屢々引用している。「佐久間象山の書簡」「貝原篤信娘へのさとし状」などがその例である。こうした一見古めかしく見える考え方と同時にその論説は極めて詳細で科学性に富み、合理的で実際的であるところが彼の書の特徴である。

このことは「幼稚園初歩」や「幼稚智恵のみちひき」にも言えることで、彼はフレイベルの説に基盤を置きながら、実際の方法論では、我が国古来の玩具を使用し折衷させるやり方を試みている。

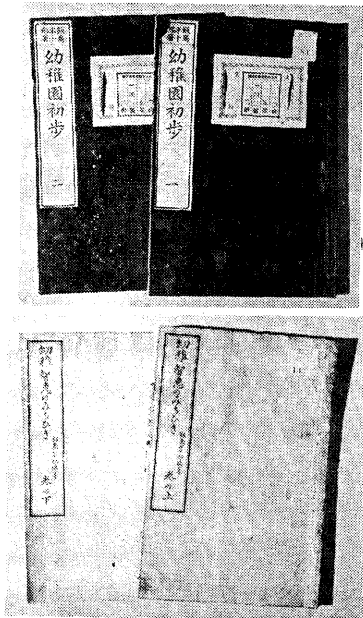
#### (十一) 幼児教育に従事？

彼は「幼稚園初歩」の凡例で次のように記している。

「方今各地幼稚園の設ありと雖、世人未だ幼稚保育の肝要なることを知らず、教育に従事する学士と雖、或は論して幼稚園

は、却て幼稚才能の発達を妨ぐるものなりといふ、これ大なるあやまりなり、予故に此の書を著はし、世に幼稚園の設なくはあるべからざることを説き、又簡易なる幼稚保育の方法を説きて示すなり、予の此の著あるは、実に教育に従事し、深く感ずる所あればなり、明治十八年二月 著者 虚心識（——線は筆者）

これをみると彼は実際に教育に従事していたとあり、明治十八年二月とあるから、それ以前のことになる。彼は、その頃、埼玉県蔵国比企郡松山町九十八番地に住んでおり、玉林晴朗の書いたもの（<sup>6</sup>）を読むと、「虚心は明治二十年頃武州の松山町に◀「幼稚園初歩」と「幼稚智恵のみちひき」



生徒を教へてゐた事があり、其の当時生れた娘があつて、虚心の歿時には十四五歳となつてゐた」とある。

しかし私の調査のかぎりでは、今のところ彼がどこで教育に従事したか不明である。公立小学校の名簿にも彼の名前を見いだすことはできなかった。おそらく「幼稚園初歩」のさし絵に記されているような小人数で家庭的な小規模な保育施設を、自宅を開放して行なつたのではあるまいか。このあたりは今後とも調べたいと思う。とにかく彼はフレールベルの遊戯の精神をよく把握し、保育の実際には日本古来からある玩具「おはじき」「智慧の板」「双六」「人形」などを使用して彼独自のユニークな遊戯を展開させている。当時の保育書が皆翻訳で恩物の解説に終つていた時代に、「幼稚園初歩」だけは日本の子どもたちの遊びや日常生活で使っている材料に目をつけ、フレールベルの意図する教育的価値をこれらに見いだそうとしている。しかも彼は日本人が江戸時代にやつていた紐の「結法」や布の「包法」などにみる生活の知恵を遊戯のなかで教えようとしている。これがどこまで教えられるかは疑問も残るが、著者の幅広い知識と美に対する感覚、詳細で学問的な指導と創意工夫が、彼独自の保育を展開させていることが興味深い。「道中双六」が地理教育に最益とみていた彼は、幼稚園こそ人間教育の草木

の苗床に当たると考えていたのである。

## (十二) 浮世絵の研究と晩年

彼は五十歳前後から浮世絵研究ひとすじに歩き始めた。玉林晴朗は彼のことを「浮世絵研究の先覚者」とし「虚心の浮世絵研究史上に残した足跡は偉大である。其の著書の内容は今日から見れば不充分的の箇所もあり、又誤伝もあるが明治二十年時代に於いてこれだけの著作をした事は浮世絵研究史の上に一時代を劃したと云つてよい」と述べている。彼は資料蒐集のため各

▲飯島半十郎自筆の和歌

笛竹の根家の  
よきよき  
よきよき  
よきよき

方面に足を運び詳細な研究をなし、名著「葛飾北斎伝」をはじめ「歌川列伝」「浮世絵師便覧」など数多くの著作を残した。  
 (その一、表で掲載)しかし彼の努力は酬われること少なく、晩年は好物の酒代も友人から贈られていたようである。晩年は娘と二人で上根岸の元三島神社の脇に住んでおり、その近くに大月文彦も住んでいた。胃腸で亡くなる前に、酒を出す故沢庵でかりかりと音をたてて一杯飲んで貰いたいと知友を集めた事があり、彼の藏品は此の時に多く売り払われてしまったと言ふ。その頃の歌に「笛竹の根岸の里に住みぬれど世にならずべきひとふしもなし 虚心生」とある。明治三十四年八月一日歿、享年六十一歳。

誰からも知られることなく埋れていた半十郎の生涯をひもとくことによつて、私は倉橋惣三の言つた言葉「兎に角関信三につぐ、当時の幼児教育の研究者では無かつたかと思はれる」という意味を思いめぐらしている。浅学な私にとつて、彼は余りにスケールが大きく趣味豊かな江戸っ子であり、淡々と生きたその姿は、まさしく虚心がふさわしい号の人として世界の中の日本の将来を考えていたと言えよう。

研究調査のため多くの方々にお世話になったことを心から感謝申しあげたい。

なお「幼稚園初歩」「幼稚智慧のみちひき」は「明治保育文献集」<sup>(10)</sup>に複製版として掲載されていることをご紹介しておきたい。  
 (国立音楽大学)

註(1)「洋々社談」岡敬孝編集 第九十五号 明・16・3 国学院大学図書館収

(2)「洋々社談」飯島半十郎編集 第三十五号 明・10・10  
 (3)「山林局務引継書」明・13・3 早稲田大学図書館、大隅文書所蔵(長池敏弘著「桜井勉の生涯とその事蹟」(一)

「林業経済」No.305 昭・49 林業経済研究所)

(4)玉林晴朗著「浮世絵研究の先覚者飯島虚心」『書物展望』昭・13・7 28頁

(5)大曲駒村著「飯島虚心翁」『書物展望』昭・9 319頁

(6)玉林晴朗著「前掲書」32頁

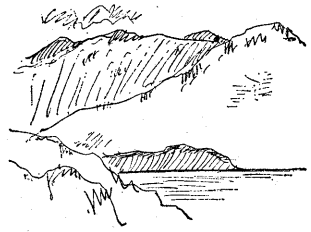
(7)玉林晴朗著「前掲書」

(8)春風道人著「明治逸士伝 有髮比丘根香亭」明・38・6・

25『東京日々新聞』

(9)倉橋惣三、新庄よしこ共著「日本幼稚園史」昭・9 フレ  
 ーベル館 378頁

(10)岡田正章監修「明治保育文献集」第四巻に収録 日本ら  
 ぶり 昭・52



## 私の保育

宮下美智代

「木曾路は全て山の中である……」と藤村の文章で知られる木曾、そして今も「木曾谷」という。

木曾川にそって、まるで谷底のような所で、人が集まり街をつくっている。その中にある幼稚園——木曾幼稚園。木曾幼稚園が生まれた五十六年前、「幼稚園をつくりたいと思うが」という祖母の設置の願いに、「幼稚園とはいったい何だ、どういうものなのか」と問われたという。

しかしそれから半世紀後、幼稚園というものが、町の生活の中の一部となって、あってあたり前というものになって来た。人口一万という町の中で、その後保育所ができ、別に幼稚園もできて、今やこの町の一年生は、就学前にはどこかの園で必ず集団生活体験をすることになって来ている。

しかし、今思う。「幼稚園とはいったいなんだ、どういうも

のか」という、五十六年前の問いを今一度、考えなおすときではないか、と。

幼稚園とは何か。子どもあつての幼稚園、子どもあつての保育者である。子どもあつて、「私の保育」が書けるのである。しかし、子どもあつて、ということに甘んじている保育者、幼児教育関係者、そして私ではないか。

「子どもあつて」のために、私立幼稚園として幼稚園本来の使命を忘れ、子どももある（在る<sup>カ</sup>集める）ことのみを力を使っている幼稚園が多すぎはしないか。子どもが、子どもの力を尽して生きる場としての幼稚園を、園長、教諭はどれほど心してゐるだろうか。

幼稚園とは何であるうか。(私はこのごろ、わからなくなつて来ている)

「誰も見ていないからといって、悪いことをしたとして、どなたかが見ていらっしやいますよ、それは神様(良心、心の神様、神)です。だから、人が見ても見ていなくても、悪いことはしてはいけません」と、創設者であり四十八年間毎日子どもと過ごし続けた祖母は、子どもにも生前こう言っていた。そういうなかで、そのことは、人間として守るべきあたり前のことと思つて来た。しかし大人の世界では、このあたり前のこと「正直に生きる」ということが、何と苦しくむずかしいことか。正直に生きて、あることないこといわれる世の中のむずかしさ、——しかしそれだからこそ、これからの世界を、町を、つくっていく子どもたちには、なお、正直に生きる、正直に生きることがまた世の中をもよくしていけるような、そんな在り方、生き方をしてほしいと思い、それで私たちは、幼児教育に情熱を傾けている。

教育というと、すぐ「どれだけ物を識しっているか」ということに結びつけたがる現在であるが、その知識を良くも悪くも使うのは、それを使う人間——個々の「人」にまかせられる。こ

の人——人格——というものをみつめながら、今、ここで、あたらしく、子どもたちと何を展開していったらよいのだろうか。

子どもたちは、朝のひととき、自由あそびと称する活動をもつ。これは「人との関係」「物との関係」のなかで、「自己のやりたいこと」を選び、決め、そして行なう、という、子どもにとっては大きな意味のある時間である。

入園して一か月になるこの朝も、子どもたちは活動を展開しはじめていた。そこへ門の塀のところから、おとなの声と風船がみえた。気づいて門の方へ走っていく子もある。八人のおじさんたちが手に手に風船を持って来園されたのである。「山の緑を大切に」「山火事を出さないように」等と、その風船には文字がはいっていた。山の中の木曾ならではのことである。(営林署と地方事務所の方々であった。)

子どもたちは風船のそばへ行き、いつもらえるのかという風である。おじさんたちは「山の木を大事にしてください。風船は先生にわたしますから先生からもらってくださいね」と。

子どもたちは今か今かと喜んでいますが、私たちは迷う。「どうしましょう」

「降園時まで（わたさないというの）では、かわいそう」

「かといって、これ握っていたら活動ができないわね」

しかしそうしているうちにも、子どもたちは担任の手もとにくっついてくる。迷いながら渡す。渡しながら考える。子ども

たちは、風船をながめたり、まわしたり。そして体全体ではねる子もいる。私の手にも二つの風船。風の中で風船がゆれる。

高く手を上げれば風船はおどるかのようだ。おとなの私でも風船を手にもつてみれば、どこかうれしい。体をくると回転させたり、ギャロップをやってみた。

「あっ音楽!!」

「レコードかけたらどう」

「やってみましょうか」

昨年の運動会では園児全員で、表現集团的活動（園児、教職員でつくった物語、音楽、表現方法、演出で行なった）をしたことがおもしろい出され、私たちも胸がおどる。

レコードの方へ走っていく先生、やがて音楽がなる。体を私たちが動かしてみる。

「ああ、楽しいな」

子どもたちは風船を受けとると、ながめる、さわる、体全体で抱くようにしてみる、高く上げてみる……しかし体につけ

て、そのために動けなくなっていることも多い。しかし音楽がなると、ビョンビョンと両足のままとび上がってみる。年長組の子どもたちは、スキップも展開しはじめ。

「踊ろうか、小人さんになってみよう」

とリーダーシップをとる先生がいて、

「風が吹いて来たから、舞っていいのかな」

と状況設定をし、子どもたちの中に動きが生まれやすいようにつぶやく保育者がいる。それをみながら、踊る動きにのれないが、「ここで私は何の役割をとったらよいかな」と考えている保育者がいる。

こうした保育者集団の役割分担のなかで、子どもたちは流れる音楽に体をのせ、風船をゆらせ、踊る。バラバラに散在して体を動かしていた子どもが、一人の先生のうしろに次々とつながって、ハトがむれをなして舞うような場面も出現する。先生とは別に年長組の子どもたちも、五〜七人くらいでつながって園庭を動く。そして、一人で踊っている人も、その一すじの流れに出会い、つながっていく。

ふうせんを持って立っている人の横を保育者が通りぬける姿は、どうもトンネルかな。立っている人も活動に十分参加してゆけるよう、役割を与えているらしいな……とこちらから私は

その状況を推察し、では私はつばめにでもなつてそのトンネルをくぐつてみようか、と、そこへ走っていく……。

このようにして活動は十分から十五分くらい続き、子ども、保育者とも汗をかいて、満足して踊りながら部屋へとはいっていった。

計画外の予想もしなかつた風船も、幼稚園の保育活動の中に、こうして位置づけることができた。

ここで、「幼児の性格形成の基盤は、活動そのものの創造である。」(映画『かわり』松村康平氏指導)を今いちど認識する。

風船という「物」と出会い、物媒介によって、「人」と共に行なう体験をし、「人」と出会うことができる。「物媒介、表現活動、集団体験」が風船によつてもたらされた。

こういう幼稚園の一コマにみられる活動から、子どもも大人の私たちも、学ぶ。

物との関係の中で、人との関係の中で、自己との関係の中で、そうした状況の中で、どう「ふるまい」を学んでいくか……この習得が、幼児教育の課題である。

そして、そこに参加する保育者にしても、子どもが音楽と風船の世界に楽しみ、そのことによつて、子どもによつて新しく

育てられ、子どものあとを追うかのように活動に参加していくことがあるということも、体験してとらえることができる。

新しく育てられる保育者、今いる人となかて、今いる子どもとの中で、発見できる保育者でなければ、「ふるまい」を学ぶ幼児教育の課題をとらえられない。

保育者自身の課題として「今、ここで、あたりしく」常にある。

「集団保育の主要な原理は三者関係である。三者関係的に関係をとりえてふるまえることが、集団活動の発展をもたらす」

(松村康平氏『幼児の性格形成』日本私立幼稚園連合会編より引用)

この「関係をとりえてふるまうこと」は、日々の刻々と展開される保育の中で、常に意識しようとしなければわからない。身につかない。「私はわからない」といい切ることによつて、わからう、考えよう、やってみようとする人との関係までくず

してしまい、新しいもの(発見するもの)を育てようとする保育活動にも背をむけることになることがある。この点はわからないけれど、この点では共にできる、という可能性を残した考

え方、物のいい方、ふるまい方を、私たち自身が課せられていと考える。

まわりも生かし、自分も生かし、そういう活動をより多く持とうとすることが、保育活動とつながってくる。「みどりを大切に」という風船も生かし、近隣社会と接在共存する幼稚園の幼児の活動も生かし、そして、私たち保育者もその活動によって生かされることのできる活動——この活動が生き、生きと展開されるよう配慮するのが保育者の仕事である。

物との関係、人との関係、自己との関係の中で、自己の活動をよりよいものという課題は、このふうせんばかりではない。(このふうせんについては、大きくふくらましたり、また小さくしほませたりして、これからの遊びのなかで「ゆめのふうせん」を想像させ、活動を創造させていけると期待している。ひょっとしたら秋の運動会の表現活動につながられるかもしれない)

幼稚園の活動はどこをとらえても、この原理がみつけれられる。例えば、二十日大根をまく。

。まいた種から芽が出ることを待つ。……(物との関係に於いて学ぶ)

。あ、芽が出ている」「でも僕のはまだ出てない」「なおこちゃんのは出てるね」「ウン、これ二つも出てるよ」……(人と

の関係に於いて学ぶ)

。「ほくのはまだ出ない。つまらないア、チュ!!」きつと「出なかったら泣きたくなっちゃうよ」と自分自身をなぐさめたり、こらえさせたりしているにちがいない。……(自己との関係に於いて学ぶ)

そうしているうちに、ほとんどの子の植木ばちに芽が出て来た。

「あっ今日僕の芽が出たよ」「フーン」「僕のなんか、こんなに大きいよ」「あれ、これだけ出てないアー」「まさるちゃん、水やった? 水かけてごらん、明日は出るよ」

物、人、自己との関係の中で学んでいく子どもたち。「性格形成の基盤となる子どもの活動」としての幼稚園の生活の大切さを痛感する。

たとえ二十日大根は小さくても、この発芽について友だちどうしでこんな会話が育っていると思えば、子どもの心の大根の根は大きいものであるにちがいない。発芽に何日かかったかを識るよりも「まさるちゃん、水かけてごらん。明日は芽が出るよ」という子どもの心を、私たちは大切にしたい。

子どもの生活、活動は、多くの者、多くの物と接在共存しな



から展開していく。

そのことを考えながら、幼稚園、子ども、家庭をつなげてみよう。

家庭連絡ノート「ハト」がある。このノートは、子どもの活動がより以上に展開されるために、家庭と幼稚園とが十日から十五日に一度通信をとりあう目的でつくられ、今年で十一年目になる。これは、私が在学中に出会うことのできた本『お母さんほくが好き』（松村康平氏指導 林昌子・のぶゆき著）から教えられ、はじめたものである。一年目は横がきにしたり、たてがきにしたり、内容もバラバラしていた。ノートに印刷するということも慣れず、ななめに印刷して読みにくい頁もできた。五年たって少し「ハト」らしくなり、九年目頃、やっと今の「ハト」になった。どうも幼稚園からの連絡が多くなってしまいが、それでも必ずお家の方の欄をつくり、そこに返事や家庭からの通信を書いてもらう。

あるときは、子どもの逆境体験についてどう思いますかとたずねたときもある。お母さんは自分の子ども時代の体験を、そして我々子どもとのふれあいの実際を、それぞれのことばで記入してくださった。それに応えようと職員も一か月近くかかっ

てよみ、まとめ、そして討論しあって、五月頃にまとめ次号で家庭におしらせした。

こうしてハトのノートで、私たち保育者が、お母さんの体験を、今の子どもに期待することを学び、それを次回のハトに生かす。まるでボール投げのようである。私たちがボールを投げると、お母さん方がそれをにぎりかえしてこちらに投げ、また私たちがそれをにぎりかえして投げる、そしてまたお母さんから……と。

このにぎりかえしてやりとりするごとにあたらしくなるお母さん、あたらしくなる保育者、そして、大人がかわれば子どももかわってくる。

私たちの生活は流れのようである。子どもの成長もまた然りである。流れが自然であればそれだけに流れはとらえにくい。それを一年の流れとして一冊の往復ノートによって記録することができ。子供は変化発展し、成長するものだ（松村康平氏指導 お茶の水女子大学児童臨床研究室集団指導研究会）と私たちはお母さんたちに伝える。お母さんもそう理解してください。しかし、日々のくりかえしの中で、子どもの成長の一時点に於ける悩みや疑問も、これが永遠に続くかのような錯覚に陥り、また絶望的になることがある。そのときこのハトのノート

をめぐって、過去から現在への変化をとらえるとき、現在から未来への変化、成長をも信じて、変化、成長の方向への努力ができることを、一人の母親として私も体験した。

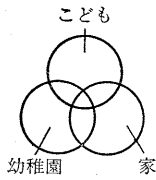
ハトのノートは、園児が各家庭手づくりの布製の袋にいれて「はいハトのおてがみ」と家庭に持ち帰る。家庭では一日、二日の間にこれをよんで感想やたよりを書いて園へもどす。これをまた教職員がよみ、職員会の話題とし、次のハトの原稿にとりかかる。私たちは、子どもをみる目を変えさせられたり、行事のやり方にも修正を加える。家庭からの返事に、一つに喜び、一つに反省し、一つに悲しみ、一つに笑いこらげる。

ここに私たちの「発見」がある。これによって、保育に向かう私たちも新しくなるのである。

お母さん方からは、「ハトのくるのが楽しんだ」といわれる。私たちも、お母さんの返事が楽しみである。ある時お母さんから「先生たちだって、私たちの返事をよむのが楽しみでしょう。私たちも先生方の返事を待っているんです」とやられ、あわてて、せっせと返事を書くようなこともあった。

「ハト」を手にするとき、常に「子ども」が意識される。家庭に於いては、子どもが寝静まった後、母親が子どもをおもい

ながら、ハトの返事を書くのであろう。



上図のような接在共存の関係を認識させてくれ、具現化した「物」として、ハトノートの存在は木曾幼稚園に於いては大きい。

はじめ七十円の大学ノートが、印刷され返事がかきこまれ、また印刷され……となって、一年たつとすでにお金では買うことのできない物に変わってしまった。「人」の手によって「物」が大きく変えられている（価値あるものに）。「ハト」を子どものために一生とっておいてやりたいと言われる方も多い。

子どもの生活は、多くの者や物と接在共存しているが、特に母親、そして幼稚園（子ども、子どもたち、先生たち）との接在共存する部分は大である。この三つを一つにつなげる「物」があつて気づき、「物」ではとらえ切れない人間の活動へと、大きく広がってくれることを願って、またハトの次の号を書いている。

「性格形成の基礎づくり」にかかわる私たちである。

「かかわりかた」を学びながら、生きたい。（木曾幼稚園）

# ひとりひとりの子どもをみつめて⑦

赤羽 美代子

五月中旬の、ちょっと汗ばむ暖かい日でした。園庭の一隅にある、小高い、小さな小山での出来事です。その日、私は園舎のテラスより、S子（5歳・女）F子（S子の妹・三歳）N夫（5歳・男）が、穴を掘っている姿を見ました。S子が、やや長めの髪の毛を横顔にタラリとたらし、スコップ（子ども用）に力を入れるたびに、S子の長髪の毛がユラリ、ユラリと揺れる様は、S子がいかに穴掘りに真剣であるかがうかがえます。又、N夫も、S子の隣りで、スコップに力を入れては土を掘り起こし、あたりに土をまき散らしています。三歳児のF子は、ふたりの側にそっと立って、この穴掘りを見守っている光景です。

私はブラリと、通りすがりの人のように、その穴の側に立ってみました。深さは浅いが子どもがひとり、座れる程の大きさ

の穴が掘られています。私を見つけて、手を繋いできた三歳の女兒が、その穴を見つけて「先生S子ちゃんたち、何、掘ってんの？」と聞きます。その問いで、私のいる事に気がついたS子は、幾分照れたように、はにかみながら「先生、私たちね、Fちゃんの仇とるのよ、＃落とし穴＃つくってね、Mちゃんをそこへ落としちゃうの」N夫「そうだよ。この穴の中に水、入れてね」と言う。

そのMちゃんは、口のきけない障害児です。今年の四月には、小学一年生になる筈の女兒でしたが、後、一年間、幼稚園の年長組に残りました。Mちゃんは、今年の始園式で、丸顔で、お目めがパッチリ、クリクリと太った新入園児のF子ちゃんを、一目で気に入ってしまいました。四月中は、F子ちゃんを見つけると、泥や水を掛けたり、Fちゃんの髪の毛を思いきり引っ

ばったりするのです。Fちゃんは、脅えて、Mちゃんから逃げ廻る日がつぎきました。

教師は、そうしたMとF子の関係について毎日、いろいろと工夫をし、思案するのですが、何しろ、F子を気に入ってしまったMは、積極的に出るF子への行動の早いこと……。MとF子が落ち着いて遊んでいるなと思っているうちに、「Mちゃんが髪の毛を引っぱった」とF子の泣き声です。今、園庭の端と端に位置して、ふたりは遊んでいたのに、Mは、つかの間にF子の側に立っているのです。

五月に入り、F子の被害も数が減ってきましたが、きょうは泥をかけられて、F子が泣いた事から、姉のS子がF子の仇討ちをする事になったようです。

Mちゃんを見ますと、いつもの泥んこ遊びに熱中しています。S子、N夫が洗面器を持って水を汲みに行きました。いよいよ、穴の中に水を入れる作業が始まったのです。

N夫は容器に半分程水を入れて、そろり、そろりと帰ってきます。N夫は途中で、Mが泥遊びに夢中になっている前を通過しました。丁度その時、N夫の容器から、鉛筆程の細さの水が、Mの泥んこの中に流れ落ちました。Mは、突然の出来事が理解できず、すっと立ち上がり、N夫の後姿をじっと見送って

いましたが、N夫の誘いでも思ったのか「ミジュ、ミジュ」(Mと日ごろ接触している者のみに解釈できることば)と言いながら、N夫の後ろに従いました。

N夫、S子の掘った穴の中に、程よく水が入り、ドロドロの池のようになりました。さあ、それを一目見たMちゃんは、目を見張り、輝かせて、身体中で笑い、ヒラリと穴の中に飛び込んでしまいました。「オフロ、オフロ。イイキモチ、イイキモチ」と、たどたどしいことばで言いながら、良い気持ちそうに、とっぷりと座りこんでいます。その穴は、Mを落し入れる筈だったのに、見当がはずれたS子、N夫は「Mちゃん、だめ、だめ」と大慌てです。仇討ちとして、Mに提供する筈だった穴が、思いがけない事から、Mにとっては喜びの穴に変わってしまい、ふたりは、困惑し途方に暮れてしまいました。

一方、Mは、泥を、手、足、身体中に、お化粧のように塗りとくります。(Mは、他の子たちと、朝からペンツ一枚になり、お洗濯遊びをしていた)とても御機嫌で「Aチェンチュ、Yチェンチュ、Sチェンチュ」と教師の名を呼びながら、ピチャッピチャッと、泥を手、足に叩き込んでいます。Mの躍動力にひかれてか、ひとり、ふたりと、周囲の子どもたちが寄ってきては、「あっ、Mちゃん、いいな、いいな」と見ています。時

どき、泥がはねたり、Mに掴まえられて「キヤー」と少々大きさに逃げまわります。大勢の子どものとの交わりが嬉しくて、Mは「キヤーキヤー」と声を上げています。

その時、S子が「先生、私もMちゃんのように、泥んこになりたいな」と言い出しました。S子の母親は、綺麗好きで、あれこれと口やかましい人です。S子は「帰る時には、一つも泥が付いていないように洗ってくれる？」と、幾分心配そうに聞きます。「泥が全然、ついていないように、洗って上げるわよ」「僕も、やりたい」と、N夫が言いだしました。N夫の母親も、S子の母に勝る神経質な人です。「あと綺麗に洗ってくれる？」「ハイ、OK」と、私が指で丸をつくって承知すると、S子、N夫、F子たちは、お部屋へ急ぎ駆けて行きました。

やがて、パンツ一枚になったS子・N夫・他の子たち数名が、身軽になってとんできました。Mちゃんの体で白い部分は、顔だけになって「Sちゃん」と立ち上がり、両手を万歳させて、大変に見事な歓迎ぶりに、一同、「ウワーッ」と立ちどまりました。けれども、Mが嬉しくて、嬉しくて踊り出したすきに「わあ」と言いながら、子どもたちは、小さな穴の中に滑り込みました。穴はもう平らになちかく、ドロドロの田

圃のようです。Mと同じように、互いに、身体に泥をつけ合ったり、自分の身体に叩き込んだりです。

プール・水遊びの時の先陣を切るのは、いつもMちゃんです。シャワーで乾いた身体を濡らす時、プールの水に入る前に身体を堅くし、決断をしかね、ひるんでいる自分たちの前で、Mちゃんは、何の苦もなく率先して、まるで蝶のように、ヒラヒラと、喜びと、希望をこめて、舞うように冷たい水の中に、身を呈するMちゃんです。そんな時、全員の子どもたちは、子ども特有の自己主張もなく、他者否定もなく、非常に素直に、尊敬の意を表わして、Mちゃんに全員脱帽するのです。

この日も、Mちゃんの泥遊びぶりには、他の子たちは、手も足も出ません。Mは、泥遊びにかけては、誰にも負けない年季が入った立派な泥職人です。白い所は顔だけのMに比べて、他の子たちは、むらむらな泥だらけの身体です。Mに抱きつかれたり、引っぱられたり、子どもたちは、泥と水と人間の戯れによって、原始人の深遠な心性に返ってしまったようです。おとなである教師は、手も足も出なくなっていました。自然との交わりの中で、子どもたちの人間関係は、助け合い、いたわり合っているようです。

Mへの仇討ちが、思わぬ方向に発展してしまいました。泥に

かけては第一級の職人・Mちゃんを先頭に、或る時はお風呂になつたり、或る時は泥んこ練り屋になつたりで、狭い田圃が広びると広がり、S子、N夫、F子はとうとう、ミイラ取りがミイラになってしまったようです。

降園時、グループに分かれておやつをいただきました。驚いた事に、その日のグループに、S子、N夫、F子、Mがちょうど座っています。他の子ども数名もまじえて、グループを組んで楽しげに語り合っていました。

それ以後も、今だに、Mは、時どきF子の髪を引っばります。けれど、髪をちゃんと引っばっては、F子の顔を覗き込んで、ニコッと笑うのです。F子は「先生、Mちゃんが私の髪の毛を引っばって、笑ったよ」と言いききます。

私たち教師が、M、F子の関係を、ああか、こうかと願ったり、思考した事を振り返ってみますと、結果的には、MとF子の「伸よしごっこ」を願っていたようです。

この泥遊びを通して、幾つかの問題を上げ、教師会で話し合いました。一つには、教師が共に泥遊びに入っていたとしたら、又、違った立場から、子どもたちが、心の奥底で感じとめ、味わった味を、私たちが又、味わう事ができたらう。(け

れどあの時、子どもたちは、遠い原始の人になって、私たちおとなから遠くの世界の人になってしまった)又、この泥んこ遊びをさせ放題にして、教育的怠慢があったとは思えない。子どもたちは、自分と友人との関係が、泥を媒介として、優しく、素直な結びつきをもち、そして、互いに許し合い、あの狭い田圃が無限な広がりをもって遊んだ事である。私たちおとなの狭い力量を乗り越えて、広い子どもの世界で、F子、Mは自然に接近をした。

以上の事ごとくも、四月以来、私たちが、ああかこうかと思し、実行した積み重ねが、何かの土台になって働いた事も、思い合わせて話し合いました。

「遊び」とは、最高級の学習である事を(子どもにとっては、学習ではない)今更に、感じている次第です。

(靈南坂幼稚園)



# 米国の幼児教育における五つの実験(十四)

—教師行動についての新しい研究の試み—

大戸 美也子

はじめに

六十年代の補償教育の定着、改善運動そして七十年代の公教育改善運動を通して次第にはっきりしてきたことは、教育改善に果たす「教師の役割」の重要性である。どのようなすべられた設備も教材もカリキュラムも、子どもたちと直接ふれる教師が有能で、知識をもっていない限り、質の高い教育を保障しないというものは、教育界の常識である。また、望ましい保育者の資質を明らかにしようとする努力も、関係者によって長いこと続けられてきたことで目新しいことではない。それにも拘らず近年、教師の問題が改めて注目されはじめたのは、第一に、特定の研究者以外の人々——政府の文教政策をすすめている人々や教師自体が、それぞ

れの立場から教師の資質の向上に関心をもちはじめ、同時にそのための具体的な試みをはじめたこと、第二に教師行動の研究法が近年改善され、現場への応用可能な成果を挙げはじめたこと、等の理由が考えられる。

第一の具体例として、政府による「児童発達協力者プログラム」(The Child Development Associate Program)の発足、教師による「ティーチャーズ・センター」設立運動があげられる。児童発達協力者プログラムとは、現場の保育者の技能(Klein)と態度の向上をはかるために、「保育の責任を果たし、幼児の集団を發展させる能力」(Klein, 1973 a, b, c)をもった熟練の保育者を現場(特に無資格者の多いデイ・ケア・センター)に、二か年位派遣してすすめる現職教育プログラムである。今日、高い資質を

もった保育者の選別基準、また現場の向上を測る方法の開発を、民間団体 (The Childhood Development Associate Consortium Inc.) に委託してすすめる一方で、いくつかの実験的プログラムもはじまっている。また、ティーチャーズ・センターとは、オープン・エデュケーションの普及と共に、永続的な資質向上を求める教師たちによって各地に設立されはじめている現場教師の学習、情報交換の場である。今日、米国では、英国のティーチャーズ・センターを模範として、その規模、運営、内容について各地で試行錯誤がつづけられている。

次に、第二の教師研究の変化として、「はっきりとらえられる一定の教師行動とその行動の子どもへの影響」をみる二者の相関関係の研究から、この相関関係が保育過程の他の要素の影響を受けてどれだけ変動するかという研究へ関心が移ってきたことが指摘できる。たとえば、ゲイジ (Gage) は効果的な指導者の資質に、文献を徹底的に分析した結果、次の五つの要素を見いだした。(1) 暖かさ、(2) 認知的組織力、(3) 構成力、(4) 非指示性、(5) 問題解決能力。ところが、今日多くの研究は、これらの要素は子ども状態、教科内容によってその効力は必ずしも一定しないことを証明しはじめている。

新しい研究の成果は、教師の資質のとらえ方、養成の仕方に新

しい根拠を与えたので、ここでは、新しい教師行動の研究成果の傾向をとらえることで、教育の質の向上への途を検討してみた。

### 一 効果的な教師行動に関するこれまでの研究傾向

効果的な教師行動の研究は、米国で最も数多くおこなわれている研究分野で、今日まで約一万の研究があるということである (Bridle & Dunkin, 1974)。しかし、組織的な観察法によって、実際の教師行動をとらえた研究数は十分の一以下に減り、幼児教育に限っていくとさらに減少し、「最も不毛の研究領域」(Gordon & Jager, 1973) ということになる。ビドル等がおこなった五百の教師行動の研究のレビューには、幼児教育は完全に除外されているし、ゴードン等のレビューでも、どのような形に除外されているについて組織的な記述法をもつてすすめられている研究は、六〇年代全体で十三しか見当たらないのであるから、先のゴードンの指摘は真実味をもっていると言えよう。七〇年代に入って、各種の実験的教育プログラムの有効性を教師の行動の観察を通して評価する傾向が出てきて以来、このような研究は若干改善されたものの、研究データから望ましい教師行動を描き出すことは殆ど不可能に近い。但し、ゴードンのレビューに使われた研究



表 教師行動の研究タイプ

	動機変数	経過変数			結果変数 子どものテスト 結果	研究者名
		教室の条件	子どもの行動	教師の行動		
I				×		Hackett
II	× (信念)	×	×	×		Harvey Scott Brown
		×	×	×		
		×		×	×	Dilorenzo Conners Beller Soar Katz
III			×	×		Prescott Katz Kounin
			×	×		
			×	×		
			×	×		

のタイプを一覧してみる  
と(表参照)、第一に、教  
師行動の類型化の研究、  
第二に、教師行動に影響  
を及ぼす要素を分析する  
研究、そして第三に、教  
師の一定行動と子どもの  
成長あるいは行動の変化  
との関係をみる研究の三  
つのタイプの見られるこ  
とがわかる。

行動(たとえば特定の指示行動とか、特定の指導法に関連する行  
動)のみを観察し、意図的に観察した事項、さらには、頻度の高  
い事項だけが、子どもの行動の影響因子として扱う傾向が強い。  
このような恣意的な研究の応用価値は、必ずしも高くないことは

言うまでもない。

## 二 効果的な教師行動の研究に関する新しい研究傾向

「非指示性」とか「受容性」という項目は、効果的な教師行動  
の要素として、従来安定した評価を得てきたが、「最適性に関す  
る研究」の進展によって、この評価も修正されつつある。

### (1) 最適性に関する研究

フロリダ大学のソアー(1968)は、教師の非指示的行動と子ど  
もの三種類の学習効果——語い、読書能力、創造性——との間  
に、非相関(nonlinear relations)の仮説をたてて研究をおこなっ  
た。つまり、創造性は教師の非指示的行動とプラスの高い相関を  
示すが、読書能力との相関は低下し、語いではむしろマイナスの  
相関を示すという仮説をたてたのである。結果は、この仮説が裏  
づけられたのみならず、非指示性の「程度」が子どもの学習の側  
面に異なる影響をもつことを明らかにしたのである。このような  
研究結果から、彼はさらに次のような仮説をたてた。

「より複雑で抽象的な学習の場合、非指示的であればある程そ  
の得点は高くなるが、より単純な学習では、ある程度の非指示性  
を越えると逆に得点は低くなり、学習効果を低める(逆U字型現

象」(Sear, 1972 a, b)

教師の最適のレベルに関するアイデアは、他の研究で支持され、教師の非指示的行動は、教科内容の性格によってその効力に違いの見られる事が明らかとなった。同じようなことが、フランダーズ(1970a)の教師の子どもの考えの受容度に関する研究でも指摘されている。すなわち、小学校六年生では、受容度の高さと態度変容の間にはプラスの相関がみられるが、二年生ではむしろマイナスの相関となる。この研究では、子どもの発達段階によって、教師の受容的行動の影響が異なると指摘している。また、クーン(1970)の注意行動の継続研究では、第一日目と二日目以降とでは、注意行動の機能が変化してくるところを見出している。教師行動のタイミングに関する研究の重要性は、フランダーズ(1970b)も指摘しているが、具体的な研究はまだ実っていない。

以上の研究は、一定の教師行動が、学習内容の性質、子どもの年齢、またその行動の出現時期によって、その影響力に違いのあること、言い換えれば、予測しない他の行動要素が実際にはいろいろな形で子どもの行動を規定していることを示唆しているといえる。

## (2) 生態学的な研究

特定の教師行動と子どものある行動の変化とを、簡単に結びつけることの困難さが自覚されてくると、自然な状態での子どもの多様な活動をとらえ、それらが場の特性とどのように関連し合っているかを注意深くみていこうとする生態学的な研究が重視されはじめた。人間行動の生態学的な研究は、レビンによって米国にもたらされ、パーカーによって発展してきた(Barker, 1968; Sem, 1975)。行動を文脈との関連でとらえようとする研究方法である。丁度、環境の性質によって植物分布が異なるように、人間においても、環境の性質と行動パターンとの間に一定の関係が認められ、どのような環境下で、どのような行動パターンが出現するかその全体的な分布を明らかにできるといわれる。一九五〇年代に、パーカーを中心に、中西部の子どもの行動の生態、大きな学校と小さな学校における子どもの行動の比較など行なわれたが、莫大な時間と経費と労力のかかるこの研究法は、その後衰え、七〇年代に入って再び注意されだしてきた。今日の生態学的研究は、パーカーの研究に比べ、行動のエピソードの記述も、それと対をなす行動環境の分析も大雑把であるが、この方法の活用によって、教室が複雑な行動環境から成り立っていることが認められてきた。

例えば、フェザーストーン (1974) は、教師の介入度によって教室内のすべての活動領域を分類し、子どもの領域選択行動から、子ども・保育者関係の質を類型化し、分布状況を明らかにしようとしている。このような研究の成果は、教室内に展開しているさまざまな子どもの活動状況 (Situational Gestalt) をとらえ、状況の発展にふさわしい教師行動を決定していかなければならないオープン・エデュケーションの教師に役立つものであるが、この研究の進度は極めて遅々としている。

### (3) 相互交渉過程の研究

大規模な生態学的研究に代わるものとして、保育者—子どもの相互交渉のきめの細かい研究が最近注目されはじめてきた。この研究は、母性行動の分析のために発展してきたものであるが、従来の教師行動の研究では完全に見すごしてきた微妙な行動 (間のあけ方、視線等) に焦点をあて、その影響力をみている点、極めて得るところの大きい研究である。次に二、三研究の事例をみてみよう。

シャプラー (Schaffer, 1972) は、母子間の視線の合致 (Visual Synchrony) と子どもの社会化との関係について興味深い研究をおこなっている。いろいろな遊具のおいてある新しい環境に母子

を入れて、そこでの二人の相互交渉過程をみた。「乳児は、まず最初に遊具を見、次いで母親を見る。母親は乳児のそのような動きからある手がかりを得て、実にタイム、ミグ、よく子どもに応じてから遊具を見る。……」この短かいエピソードの中で何が起こっているかという点、シャプラーは次のように解釈する。「目と目が合うことで、二人は環境の中のある面の興味を分かち合うのである」と。類似した場合は、保育の中でもしばしば見られることではないだろうか。「言葉かけ」だの「指導の手順」の中にだけ教育機能があるのではなく、このようなあまり価値をおかないできた行動の中にも大きな教育機能のあることをこの研究は伝えている。ニューサン等 (Newson, et al., 1972) も、母親が赤ん坊の発するシグナルを読んで直ちに反応する「行為 (Contented Reaction)」は、子どもの興味の形成にかかわる働きのあることを指摘している。

これらの研究のテーマは、毎日子どもをしつかり見つめ、交渉し合っている教師が経験的に「大切なこと」として把握している事柄と類似していないだろうか。子どもと子どもをとりまく人や物との関係を仲介していく保育者は、実際にはもっとさまざまな形でその仲介機能を果たしているように思われる。(注) 今後の重要な研究領域の一つと考えられる。

### 三 研究成果、共有の途

教師行動の研究法の変化は、教育現場の質の向上の一つの動機とはなっても、研究成果が現場でフィードバックされ、それを再調査できる流通システムがないと、現場にその成果を反映させることはむずかしい。英・米で次第に増大しているティーチャーズ・センターは、現職教師が相互に経験の叡知を分かち合い、互いに刺激し合う「教師の、教師による、子どもたちのため」の学習の場として注目を受けている。

「教師になる過程は、永続的な過程である」(大戸、一九七一)、我が国では、これから教師になる人のための養成活動(Preparation)は非常にすすんでいる反面、今、教師である人の問題解決のための組織的な援助活動(Peer-help)は極端に限られたものしかない。しかし、後者のサービスの充実は、保育の質の向上と一体となっているのであるから、今後、ますます現職教師の援助活動は強力に、そして組織的なものとなっていかなければならない。また、その一環として、今日各施設、団体で独自にすすめられている研究活動、研究成果を集合させ、分かち合い、それらを現場の充実に広く活用できる組織の開発も同様に必要なことである。米国においても、そのような組織のできたのは七〇年代に入ってか

らで、教育研究情報センター(通称 ERIC)という民間の団体が、英語で書かれたあらゆる教育研究を収集し、政府から委託を受けたイリノイ大学の情報交換所が、これの情報の流通にあっている。定期的に全論文の詳細な妙録とインデックスが刊行される。原資料もマイクロフィルムやハードコピーなどの形で入手できるような形になっており、また、不定期であるが課題毎に刊行される研究レビューは、関係者にとって極めて貴重なものである。最近では、米国の二大幼児教育誌「Childhood Education」「Young Children」も、研究課題別の文献目録を読者にサービスする仕事や、特集に合わせてERICコレクションから関連研究を紹介したりしている。

筆者の印象では、我が国の幼児教育界は他のどの国より教育熱心で、沢山の研究物が毎年刊行されているようだが、全く「たこつぼ」的に展開しているように思われる。研究物は限られた範囲にしか配布されないから、第一に入手することさえ困難で、ましてバック・ナンバーを揃えることなど至難のわざである。今夏、各地の幼稚園、保育所から刊行されたいろいろなタイトルをもった「研究誌」を読み比べ、共通のタイトルをもつものに沢山の内容の重複がみられた。現場が違うのであるから、共通の研究があつて良いのであるが、相互に情報交換できる場があれば、各所の

孤独の奮闘はむしろ生産的なものになったのではないかと思われ  
た。情報の専有化状態を改善し、共有化してこそ人間の心も教育  
の質を高める途があると思つてゐる。(ついで)

本 教師の仲介機能を重視する結果、最近の英米の文藝作家が、教師の働  
きや agent (仲介) とか catalyst (触媒) とか transactor (媒介) とく  
ら、言葉のあひだの間に流石のうづらやをいふ。

#### 文 庫

1. Barker, R. *Ecological psychology*. Stanford University Press, 1968.
2. Bidle, B., & J. Dunkin *The Study of teaching*. New York: Holt, 1974.
3. Featherstone, H. The ure of setting in a heterogeneous preschool. *Young Children*, 1974, 29(3), 147-154.
4. Flanders, N. *Analyzing teaching behavior*. Mass.: Addison-Wesley, 1970 a
5. \_\_\_\_\_ Teacher effective: A review of research 1960-1966. In R. Ebel (Ed.), *Encyclopedia of Educational Research*. Chicago: Rand McNally, 1970 b.
6. Gordon, I., & E. Jester Techniques of observing teaching in early childhood and outcomes of particular procedures. In R. M. Traverns (Ed.), *Second Handbook of Research on Teaching*. Chicago: Rand McNally, 1973, 184-217.
7. Gage, N.L. Teacher effective. In R. Ebel (Ed.), *Encyclopedia of Educational Research*. Chicago: Rand McNally, 1965
8. Klein, J. The development of the child development associate (CDA) program. *Young Children*, 1973 a, 28, 139-145.
9. \_\_\_\_\_ Symposium: CDA-The child development associate. *Childhood Education*, 1970 b, 50, 288-291
10. \_\_\_\_\_ Making or breaking it: The teacher's role in model (curriculum) implementation. *Young Children* 1973 c, 28(6), 359-316.
11. Kounin, J. *Discipline and group management in classroom*. New York: Holt, 1970.
12. Newson, J., & E. Newson Review. In B. Tizard, *Early childhood Education: A review and discussion of research in Britain*. London: NIEPR, 1974.
13. 大戸美也子 保育者養成の諸問題 『幼児の教育』 1971, 70(11), 36-39.
14. Scaffler, N.R. Studies in socialization processes in infancy. In B. Tizard, *Early childhood education*. London: NIEPR, 1974
15. Senn, M. Insights on the child development in the United States. Monograph of SRCD, No. 161. Chicago: SRCD, 1975.
16. Soar, R.S. Optimum teacher-pupil interaction for pupil growth. *Educational Leadership Research Supplement*, 1968, 1, 275-280.
17. \_\_\_\_\_ Teacher behavior related to pupil growth. *International Review of Education*, 1972, 18, 508-526.
18. \_\_\_\_\_ & R. M. Soar An Empirical analysis of selected Follow Through programs. Chap. 11 In I. Gordon (Ed.), *Early Childhood Education*. Chicago: NSSE, 1972, 229-259

# アメリカにおけるオーブン・エデュケーション(その二)

白井堯子

## IGEの実際

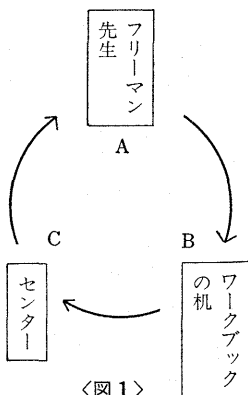
ショウ・アンド・テルで皆の好奇心が  
 き立てられたところで、英語の時間が始  
 った。(この学校では、ランゲイジ・ア  
 ーの時間、つまり言葉の使い方の時間とい  
 う) 前回に記したように、六歳児を中心  
 としたユニットAの約百人の子どもは、英  
 語の能力に応じて五つのグループに分けら  
 れ、晶子は中程度のバナナ組(十五人)に入  
 っていた。このバナナ組(指導者はフリーマ  
 ン先生)は、更に能力別にABCに三分さ  
 れ、授業を受けるのである。つまりほとん  
 ど同程度の学力の子ども五人が一組となり、

図1のように三つの勉強場所をグルグル廻  
 るわけで、よく順序を間違えないものだ  
 と感心するほど外来者には目まぐるしい。

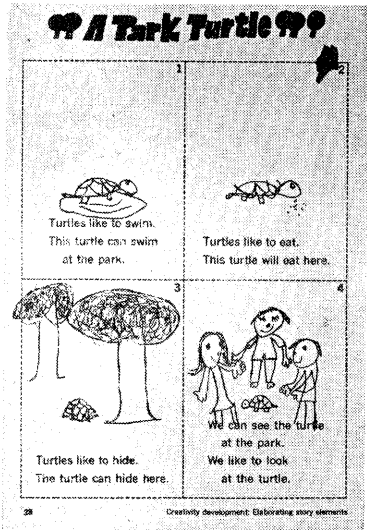
まず晶子の属するAグループはフリーマ  
 ン先生のところでテキストを読み、その間  
 Bグループはワークブックをやり、Cグル  
 ープはセンターと呼ばれる別の所に出向  
 き、そこでセンター専属の先生とゲームを  
 やったりして単語のつづりを覚える。三十  
 分たつと、Aグループはテキストで読んだ  
 ばかりのことについてワークブックをやる  
 ためにワークブックの机に移り、同時にB  
 グループはセンターへ、Cグループはフリ  
 ーマン先生のところへ動く。また三十分た  
 つと皆が移動して一巡するわけで、子ども

たちは結構この移動を楽しんでおり、引越  
 し好きのアメリカ人にふさわしい行動学習  
 法である。

三十分ごとに新手を迎える先生の方は、  
 文字通り応接にいとまがなく大変だと思  
 うが、一回の人数が五人で同程度の生徒だか  
 らうまくやれるのだろう。フリーマン先生  
 は、まずテキストを一人一人に読ませ、発



〈図1〉



〈写真1〉

授業はこのようにティーム・テイーティングによって変化がつけられ、すべてが子どもの能力に合わせて行なわれるため、落ちこぼれ

遊びながら勉強する。時には母親が来て一緒に遊んだり、リラックスした雰囲気

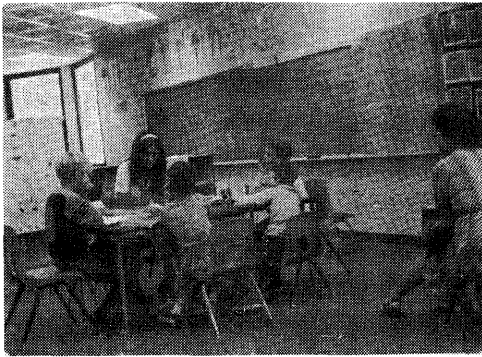
音とつづりの関係、文の内容などをテキパキと質問した。何しろ五人だから、どの子どもも何回も質問され、理解度も弱点もちどころに明らかになってしまふ。そこで一人一人の進度に合わせ、次の机で自習すべきワークブックのページが指定される。写真1はその一例で、英文に合わせて絵を描かせるもの。子どもの読解力と想像力がわかるわけだ。ワークブックは毎回先生によってチェックされ、間違いはすべて徹底してやり直しを命じられる。そして、場

合によっては、その子どもが理解できていない部分をしっかりと身につけさせるために、その子どもに応じた特別の問題が学校で、あるいは宿題として課せられるのだ。(だから宿題は、その子どもによって、与えられる時も内容も全部違う。) センターの目的は、単語のつづりなどを正確に覚えさせることで、ゲームの教材製作には親が動員され、例えば私の夫は絵に合わせて単語の母音を選ぶ教材を造った。子どもたちはこうして親の手造りの材料で

が放置されることは全くない。これは晶子のような外国人には特に有難いことで、勉強のことは学校に任せてほしいという校長先生のお言葉通り英語を全く家では教えなかったのに、短期間で発音もつづりもピタリと身についたのは、まさにこの「集団的個人指導」のおかげだといふべきだろう。もし画一的授業であったら、教室で孤立してアメリカ人との違和感に苦しんだろうし、一人一人の先生とこれほど密接な関係を持ちえなかったと思われる。

英語に続いた算数の授業も同様なやり方で行なわれた。(ただし、センターの代りにエクステンション・ルームが用いられ、算術ゲームなどが行なわれた)。算数も能力によって生徒を組分けするから、日本人の本領を発揮して晶子はトップ・グループに入った。先生はともおしやれなジョンソン先生である。(次頁の写真2はその授業風景で、横で見学しているのが筆者) 授

業程度はもちろん日本よりは低く、しかも同じような計算問題を何回も練習させるので、日本のように母親や塾が介入する必要は全くなく、有難いことであった。日本の一年生の内容と比べると、文章問題が非常に少ないこと、零の概念や不等号の記号を早くから教えることが大きな違いといえる。



〈写真2〉

## ランチと映画

これで午前のカリキュラムが終り、待望の給食時間となる。(画一化の嫌いなアメリカだから、自分のお弁当を持っていくこともできる。)給食の献立は二種類あり(一種類はハンバーガー)、朝のうちに選んでおく。私たちも申し込んでおいたので、先生や子どもたちと共にキャフェテリアで並んでランチを受け取り、にぎやかに試食した。当日のメニューは、ホットドッグ、ほうれん草のバターいため、マッシュポテト、アイスクリームとミルクで、栄養も量もたっぷりである。値段も四十七セント(約百円)と格安だが、デザート以外は味の方はあまり良くないためか、子どもたちはたいいてい半分位残していた。日本のように「残さないように」というような指導はないので、子どもたちは実に気楽に食物を捨てる。飢

えた他国の大勢の子どもたちのことを思うと、この子らはあまりに恵まれ過ぎているようで、勿体ない話である。

食後は、窓を暗くし電燈を消して、一せいに昼寝の時間だ。子どもたちは机上でうつぶせに寝るわけだが、実は皆薄眼を開けていて、小さな声を出したりし、眠る子はいない。だがこの間先生たちは、ワークブックの採点をしたり次の授業の準備をする。

この休息時間が終ると、毎週金曜日には映画が上映される(見学した日は丁度金曜日であった)。子どもたちはもちろん映画が大好きだが、それ以上に楽しみなこと、先生が紙コップに一杯くれるポップ・コーンである。アメリカ人は街の映画館でもよくポップ・コーンを食べており、映画とポップ・コーンは小学校でも切り離せない。私は遠慮したのに、夫は子どもたちと同じようにポップ・コーンを食べながらイ



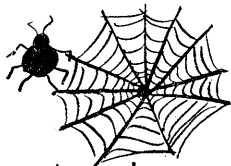
ソップ物語などの映画を楽しんだ。帰宅後皆で映画のことを話し合ってみると、口を動かしながら見た夫と娘の方が映画の内容をよく覚えていたのだから、誠に不思議であった。

こうして、小学校の一日は終わった。実に楽しい一日で、朝から行動を共にした私たちに對し、子どもたちはすっかり親近感を感じて、白人の子も黒人の子もまつわりついて、カム・アゲインノと別れを惜しんでくれた。本当に、このままこの学校に入れてもらって、英語をこんなに楽しく教えてもらったら、どんなに良いだろう。

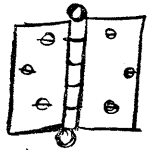
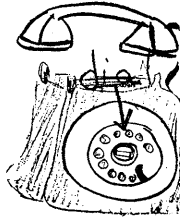
### 英語の個人指導

晶子はこの学校の全部が好きだったが、特に喜んだのは外国人のための英語の個人授業だった。アメリカ、特に私たちが住んでいたような大学都市はとても国際的で、

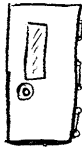
〈写真3〉



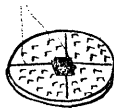
cobweb



hinge



Akiko



waffle

小学校にもいろいろな人種の子どもが入学するわけだ。その少数の子ども、またアメリカ人でもあまりうまくしゃべれない子どものために、ランゲイジ・アートの一環として特別の英語の個人指導がある。担当のサムズ先生はそのための専門教育を受けた女性で、いつも晶子を優しく迎え、子どもの気持ちをとまげることから始まって、正しい発音で話せるように、単語の数を増やすように、と一対一で指導された。圧巻

はそのテキストであって、子どもの興味に応じて全部先生が自分でつくって下さる。絵も字も実に上手な先生で、写真3はそのほんの一例だが、自分で文を書き、それに合わせて絵を描き、色をぬり、毎週の教材を集めると本当に見事な手づくりの絵本になった。こうして晶子は単語、発音、文章表現を教わり、やがて沢山の物語を読み、英語が上手になると星印のシールをもらったり、先生のお手製のクッキーをもらったりして、大満足であった。そして先生からは毎週私宛に簡単なメモが届いた。

“今日、アキコは色や食物の名前を使う文章づくりが良くてきた”

“今日、アキコは『魔法のつぼ』の話を読み、それを自分で繰り返して話すことができた”

などである。

サムズ先生の手づくりの絵本（これを本当の手本と言うのだろう）と手紙は、今も大事にとってある。それは子どもの思い出がその一ページ一ページにこめられているというだけでなく、遅れた一人の子どもに示されたアメリカの公教育制度の最良の実例として、晶子には生涯の記念となるだろう。

### 通知表——進歩状況報告

『アルプマール郡公立小学校コンティニュアス・プロGRESS・レポート・カード』という通知表には、次のような説明がある。

「児童は中学校に入る前に、英語と算数の分野で常に進歩を続け、定められた課程を立派に終らなければならない。この課程を終了するための期間は、定められていな

い。それは子どもによって異なる。

次に示す図表は、この通知表の大事な部分である。この図表は、英語と算数の進歩の状態を示す。斜線部分もしくは数字が、あなたの子どもが終了した課程を示す。

小学校生活の五年間で、英語は十一段階、算数は五冊のテキストを終らさせることが、われわれの目標だ。しかし、ある子どもはこの目標を達成するのに五年以上かかるだろうし、また他の子どもは、目標を越えて進むだろう。”

次頁の図2は、晶子が一年間の学校生活を終了した時に受け取った通知表の一部である。すなわち晶子は英語は六段階まで、算数は二冊目のテキストの真中まで終わったことを示す。I G Eだから進歩は子どもによってまちまちで、早い子どもは四年間で目標を終え、最終学年では中学段階の内容を学ぶ例も出てくるわけだ。

さらに通知表（図3）には、次のような

説明がある。

「学課と社会性などのプロGRESS・キィは、

E—コンシスタント・エクサランズ（一貫して優秀）

P—プロGRESS・アクセプタブル（進歩が認められる）

X—ディフィカルティ・イン・デイス・エアリア（この分野では不可）である。

この印を他の子どもと比較しても意味がない。二人の子どもが同じEをとっていても、その子どもたちは違った段階、違ったテキストで学んでいるのかもしれないからである。”

つまり、それぞれの子どもの進歩状況と、その段階における評価が両親に報告されるのであって、その子どものクラスにおける相對評価などは全く記されていない。親も自分の子どもの進歩状況を確認するだけで、日本におけるように近視眼的に他人

<図2>

英語のプログラム

1	2	3	4	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---

8	9	10	11	12
---	---	----	----	----

算数のプログラム BOOK 2

Book I	Book I	Book II	Book II			
1-15	16-28	1-7	8-16			

--	--	--	--	--	--	--

<図3> —通知表—

報告の時期	1	2	3	4
英 語				
読 み				
内容理解				
聞 く				
書 く				
スペリング				
話 す				
算 数				
概念の把握				
計 算				
問題を解く力				
絵 画				
音 楽				
社 会				
理 科				
体 育				

社 会 性

(良き市民となるために)

指示に従う				
自 立 性				
協 調 性				
責 任 感				
自 律 性				
他人の権利の尊重				
目上をうやまう				
礼 儀				

出席日数				
欠席日数				
遅刻日数				

の子どもと比較することは少ないようである。

通知表は一年に四回親のもとに届くが、いつも担当の先生からの評価がついている。一般にアメリカの教師は子どものことを責めるものなので、その例として晶子に対する評価を紹介しよう。

○ホームルームの先生より

「アキコの新しい環境への適応能力は素晴らしいと思う。ここ数か月の間に、急に英語をよく話すようになった。英語と算数における彼女の進歩状況は優れている。彼女は、大変ほがらかな子どもだ。私のクラスメンバーの一人に彼女がいることをうれしく思っている。御両親の御協力にも感謝している。」

○英語の先生より

「アキコは来週から三段階のレヴエルの教科書に入るようになっていた。彼女の文章の把握力は優れている。全く意味のわか

らない言葉にぶつかった時にも、今までに習った知識を使ってよく努力している。彼女はまじめに静かに勉強する子どもだ」

「アキコは大変注意深く勉強している。

新しい単語がでてきた時には、それを私が紙に書いてお家へ持たせるので、お家でも注意してほしい。彼女は英語の時間に良くやっているが、依然としてまだ少しはにかみやである。しかし、以前に比べればずい分話すようになった。われわれは彼女の特技のオリガミを楽しんでいる」

「アキコと一緒に勉強できることを楽しんでる。アキコは良く勉強している。ワークブックはほとんど教師の助けなしにやることができる。彼女は一生懸命努力するので、その出来具合は、とてもきちんとしている。彼女の進歩状況に私は満足している。彼女は大変礼儀正しい女の子だ」

○算数の先生より

「算数における彼女の進歩状況に満足し

ている。彼女は非常に正確に問題を解決する。しかし、このことは彼女の問題解決のスピードを落とさせているようだ。彼女の概念の把握力は大変優れている」

「アキコは引き続いてよく勉強している。われわれは、今、特にフラッシュカードを使って勉強している。彼女と一緒に勉強できるのは喜びである」

なお、英語、算数における能力別グループのメンバーは、一年に二度入れかえがなされること、また、能力があるという評価を受けた子どもは、スキップ制の適用を受けない。たとえば晶子の場合、英語は四段階目を終了の時点で五段階目をスキップして六段階目に入ることが許された。

次回に、PTAのこと、そしてオープン・エデュケーション全体についての感想を述べてこの報告を終了したい。(つづく)

(慶応大学)

村田修子



木の葉が落ちることを余り意識していなかった常緑樹の葉が、新しい芽生えと共に古い葉が交代してはらばらと道に散り敷くのに加えて、秋は落葉樹の葉がまじって、家の前の細い道は木の葉でいっぱいになります。道をはさんだ前の家の塀から道いっぱいには繁り出ている桜、いちょうなどです。から、ほうきではくとき手ごたえのあるくらい分量です。

最初は、東京のまん中でたかぼうきを持ってはき掃除をする。ことを、「なんて風情のあることか」と思っていました。そしてずっと以前に田舎の親戚のお祭りに行ったとき、人手不足を感じて、道から入り込んでいる母屋までの道に、箒目をつけてはいて手伝ってあげて大変感謝され、「都会の人のすることはてぎわがいいなあ」と思いもしなかったことをいわれたのを思い出したり、ときには「茶いらい葉っぱ がさ

がさするけれど、ころころころがる いいきもち」などと、渡辺茂先生に作曲して頂いた歌を口ずさみながら、朝の仕事にしています。

それは前隣の御夫妻が植物を大事にされたり、早朝から自分の家の前はもちろん、私のところの前まで環境整備をして下さるので、ほっておけないことから私もするようになって、きれいにしておかないことと同時に、その動機づけをして下さったことに対して大変感謝しているのです。

このように、新しいことをするにも、今までの惰性からぬけ出すにしても、何でも「きっかけ」が大切であることは、幼児の教育の場では特にいろいろな経験をすることです。

例えば、遊びに入れない子ども、友だちが仲々できないとき、たまたま隣にきた友だちと手をつなぐことになり、おす

おずとつないでふと見ると、自分と同じハンカチをつけていたり、同じ模様の運動靴をはいていることを発見して親しみを持つようになって結びつきができる、というように、物がそのきっかけを作ってくれることもあります。また低鉄棒で前まわりができなかったことが、一寸した補助をきっかけに一人でできるようになったことで自信を持ち、鉄棒での活動はもちろん、他の運動具に対しても、また生活全体に自信を持って積極的になる、ということとは多くの教師が経験することです。

私の朝の道掃除は、ときには出掛ける時間が迫っていて心せくときもありすし、できないときもあります。そういうときは、門をあけたとき、隣の手入れされた部分と見比べて「しまった」と後味の悪い思いをするのです。

最近家の手入れをするために四か月位門がとり払われていました。家が道から引込んでいますので、新聞を取りに出で行きますと、すぐ道がひろがっています。木の葉や、心なく捨てた紙屑などのごれた状態がすぐ目にとび込んできます。そうすると、新聞をとるよりも先ず道を、家の前をきれいにしたくなってその仕事に取り掛かるのです。それが余り覚

悟をせずに、気張らずにできるのです。門や扉があったときは、やろうとする気持ちがあんまり違ふことに気がつきました。

現在はまた門や扉ができて、それをあけなければ外の道は見えなくなりました。すると矢張り朝の道はきは、やろうと努力して門の外へ出なければならぬ感じになりました。すく手ごととき、目の前にちゃんがある、ということがこんなにも心を開かせてくれるのかしら、と思うと同時に、保育室の中で、もくもくとあき箱を重ねてはりつけたたりしているK君などの姿を思い出しました。

ときには「そんなに長くしなくてもいいのよ」と文句をいいたくなるように、セロファンテープのカッターを自分で持ってきて、はりつけた穴をあけたりして工夫している姿、やろうと思ひ、その気になったときにはすぐ手近にあること、分かっていたことと思ひましたが、改めて「これだ」と思ひました。と同時に、物だけでなく、私のものの言ひ方、いいかけ方、なにげなくしていることが、カベになっていることはないかしら、と思ひている昨今です。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

## 乳幼児期の遊びの研究

——特に三歳未満児の遊びについて——



和多 美知子

### 一 はじめに

昭和二十六年に保育の道にたずさわった頃は、保育園といつても、五歳児組、四歳児組に重点がおかれ、きちんとした横割保育形態が保たれていたが、その当時、三歳児以下の年齢は、いわゆる混合保育形態が展開されていた。そして、その頃は三歳児以下の年齢についての文献は殆んどみたらないうような状態の中で、手さぐり保育が開始されていた。それは全く五歳児、四歳児の保育を下にうすめた形態に他ならなかった。子どもの発達は母体にいる時から——集団の場では○歳児から出発すべきではなからうか？ 今までのように、うすめられた保育形態でよいのであろうか？

という疑問点に先天性肺結核という子どもを保育するにあたって強く反省させられることになった。三歳児以下に対する保育形態および内容とは一体何なのか？ 一人一人の子どもの実態の中でみつめていたいという願いからこの研究は始まった。けれどもこの試みは今から思えば全く逆コースを辿って来たことになる。資料の豊富な五歳児、四歳児のカリキュラムをもとに、三歳児への挑戦を試みた。あらゆる分野にわたっての子どもの実態把握に取り組みたいと思い、自分なりに試みて五年、次は二歳児、その次は一歳半まで、そして一歳児までというような取り組み方をしてきた。その結果、一、二歳児までの解体保育と一部年齢別中心保育を交えた保育形態による子どもの素晴らしい伸びと生きた目を見ることのできた。このように子どもの実態を見つめてくると、

大人の常識が子どもの伸びようとする芽をゆがめている点がかかりあるのではなからうか？ という思わぬ数々の疑問点にぶつかってしまった。

排尿でいえば、オシメのはずれる時期、食事と言えば何故スプーンを年少児に使用させているのだろうか？ スプーンとはしとどう違うのか？ という疑問、又最初のスプーンの持ち方が、のちのちのはしの持ち方にまで影響しているのではなからうか？

ということに対する実例からくる疑問、歩行についても、密度化された中で本当に歩行が全般的におそくなっているのだろうか？ 又「一歳六か月をすぎても歩けないようであれば、一応知的発達遅滞を考える」とかいてある本もあるが、実態はどうなのであるうか？ ○、一、二歳児に適した生活環境とは何なのか？ 子どもへの遊具やあそびについても今まで考えられていたようなもので本当に子どもが満足しているのでしょうか？ 等、数々の疑問にぶつかり、一つ一つの事態の中から、この疑問に挑戦して見ることになった。このような段階をふみながら昭和四十八年度から○歳児に取り組んでみるようになった。○、一、二歳児が友達とのかかわりあいの中で、あそびを通してどのように「心情」「技能」「生活習慣」を身につけていくかということについて、四年間の記録をもとに研究解明してみることにした。この度は○歳児と一、

二歳児とのかかわりについてのべる。

## 二 研究の動機

昭和四十八年度三歳未満児入園児三十名 そのうち、生後四か月以上の○歳児十二名、一歳児十名、二歳児八名を迎え、年齢別に一応組わけをしてみた。そして○歳児は、一、二歳児より壁をへだてた部屋にベッドを並べて保育を開始したが、この○歳児が、空腹、睡眠、排泄、痛みなどの外因的なもののみでなく、よく泣くという状態が繰り返され、担任保育がいろいろと玩具を与えたり、抱いたり試みたが、瞬間泣きやめることはあっても、余り効果が期待できなかった。しかもよく観察してみると、壁をへだてた向こうにいる一、二歳児の活発な活動の時、いわゆる年長児の声のよくきこえる時に泣き声が多くきかれることに気づいた。そこで思い切って、一、二歳児の中に○歳児を入れて保育してみることにした。すると今までの泣き声は消え、年長児の動きに目を輝かせ、見入ったり、動作にあわせて手を叩いたり、体を前後、左右に動かしたりしての笑顔と語りかけが多くみられたし、一、二歳児も○歳児に対して、とてもいたわり、可愛がるという現象がみられた。リズムあそびや体育あそびの時も歩けな



ったり、よちよち歩きの○歳児を上手にかわしながら、そして時々語りかけながらの活発な動きを見せる一、二歳児の姿がみられた。そこには自分たちは、「お姉さん」「お兄さん」だという誇りさえみられ、先生の負担も半減した。このことから今までのベッドをたたみ、部屋の改装を試みた。壁面は透明のガラス戸にし、今まで一、二歳児だけの解体保育と一部年齢別中心保育を交えた保育形態を○歳児も交えた解体へと変化させてみた。この○歳児も含めた解体保育と一部中心保育を交えた保育形態は、昭和四十八年度から始まり、四十九年、五十年、五十一年と五十二年度の現在も続いている。

### 三 研究方法

四年間の個人記録を詳細に記入し、同時に八ミリによる○歳児と一、二歳児とのかかわりあいの中でのあそびを追跡撮影した。

### 四 結果および反省

解体保育を通して、○歳児と一、二歳児のふれあいが深まり、今までの大人とのふれあい以上に目の動きと輝きが増し、子ども

同志でなければ聞かれない感動ある発語がとびだし、模倣がさかんで、活発な活動を展開しようとする意欲が見られると共に、自分でしようとし、あらゆるものにふれ、そしてためす等の外界に対する探索活動がさかんになり、生活習慣の基礎づくりが促進され、あそびが大きく展開されてきたことにより大きな効果をみた。一例をあげると、基礎的習慣づけを必要とする「食べる」ことにしても、自分でコップやお皿をもとうとし、スプーンやはしにふれたり、握って口にもっていきこうとし、手づかみでも自分で食べることを喜ぶようになる。又一歳児は大人や年長児がはしを使っているのを見ていたためか、スプーンよりもはしの方に興味を示し、正しい持ち方、食べ方さえ指導すれば、スプーンもはしも余り食べることに大差はみられないという結果をみた。このことから当園では一歳児前半から、はしを使用している。「排泄」も年長児を見て便器を嫌がらないようになり、支えられて首のすわった四か月児はオマルででき、オシメがはずれパンツになった軽々しさの中で、お尻のただれもなく、次の動きへと進んでいく。この場合、便器の形、大きさ、高さ、便器の数、便所のあり方などが大きく排泄に関係してくる。この改善が三歳未満児を受持つ担任保育の労力の減少にも大きくつながってきた。又手を洗おうとし、ハンカチやおしぼりで顔や手を拭こうとするな

ど、あそびではすべり台や階段をのぼろうとしたり、年長児が高いところからとぶのを見て声をたてて笑い、手を叩き、自分もとびたくて手をさしだし、支えてもらってとびおけると満足するような笑顔をうかべたり、はさみで紙を切ろうとしたり、又のりづけあそびでは、のりの中に手をつっこみ、ぬたくり、手についたのりを不思議そうに眺めたり、クレヨン、絵筆でのなぐりがきを楽しんだり、吹く、とぶ、走る、前転する、ぶらさがる、歩く、投げなど体全体の運動を通して、年長児とのかかわりの中で喜んで〇歳児が這ったり、歩いたりしながら、目でみ、耳できき、手でさわるなど、たしかめながら素晴らしい生き生きとした目の動きと行動力がみられた。

ここで歩行についての調査結果から、思わぬことに直面した一例を紹介したい。一園で毎年〇歳児が歩行を開始していく状態をしらべていく中に、一つの疑問にぶつかった。そこで他園の状態も知りたくて十園程にお願ひして同じようにチェックしていたら、この現象が一園だけの傾向なのかどうか？ をたしかめる資料とした。

- 一、その結果同じ傾向が十園でも見られた。
- 一、歩行開始は密度化されていても案外に早いということ。
- 二、歩行開始期が一歳五か月をすぎてからの子どもには何等か

の問題が含まれてはいたが、このパーセンテージは僅かだった。

三、以上にもまして大切な問題として浮かびあがってきたのは、歩行開始日から殆んど這わなくなった日までの日数が、二十六日以上五十六日までを要した子ども二十四名（調査人数百四名中に）顕著に問題行動がみられたということである。

その要因として、身体欠陥によるもの一六・六%、栄養失調八・四%、過保護によるもの七五%という結果を得た。歩行開始期よりも、歩行開始日から、いわゆる一歩歩き始めた時から這わなくなった日、すなわち転んでもすぐ立ってよちよち歩くという状態になるまでの「この日数」の方が問題行動児との関連が明らかになるか？ ということが驚ろきを得た。

このような観察の中でも年長児とのかかわりを多くもった〇歳児は、年長児の作品に手をだし、こわしたり持ち歩いてじゃまをしたりというような、あらゆる面での探索行動が動きの面でも活発化し、目でみつめ、追いかけて、耳をすまし、手でいじくり思考するという媒介過程を経て、精神発達が促されていると考えられる。その一例として、ディズニーのバズル積木（七個の木片で構成）が入園当初二歳すぎても中々組み立てられないが、〇歳児から年長児の組み立てをじゃまし、年長児とのかかわりの中で豊富な感覚刺激をうけた子どもは、一歳六か月でさっさと組立て、み

んなを驚ろかせた。このような現象はあらゆる面ではしばしば見られる。一、二歳児も〇歳児に対して「つかまえ鬼」一つをとってみても、心にくいばかりの配慮が展開されていく。二歳児は一歳児、〇歳児をつかまえるのをためらい、可愛そうだという表現をしながらいたわって、一つのつかまえ鬼としてのルールを保とうとする姿は、大人の概念ではちょっと考えられない場面が展開される。体を通しての二歳児と、〇、一歳児とのかかわりの中での

この経験こそが、情操教育を身につけていく大切なことではないだろうか。  
一部年齢別中心保育と解体保育等での足がための中で、今後〇歳児を出発点としての年長児への見なおしを試みていきたい。この度は〇歳児と一、二歳児の解体が「心情」「技能」「習慣」に大きな効果をみたことについての発表にとどめた。

(岡山・なかよし保育園)

〈児童園芸学〉

秋の宝石——いろいろな実——

皆川 美恵子

北原白秋が作詞した童謡に「赤い鳥小鳥」というのがあります。

白い鳥、小鳥、  
なぜなぜ白い。

白い実を食べた。

赤い鳥、小鳥、  
なぜなぜ赤い。  
赤い実を食べた。

青い鳥、小鳥、  
なぜなぜ青い。  
青い実を食べた。

いつも歌を口ずさむ、歌好きな子どもでもなかった私ですが、短くて簡単なこの歌の歌詞とメロディーはすぐ覚え、知らないうちに歌っていました。そして、赤い鳥や白い鳥や青い鳥のほかにも、黒い鳥、黄色い鳥、橙々色<sup>だいた</sup>の鳥、桃色の鳥、茶色の鳥

と、いろいろな色の鳥をあてはめて、元氣いっぱい、その替歌を歌っていききました。

世の中には、いろとりどりの鳥がいるのに、たった三つの色の鳥だけでおしまにするのは、子ども心にもおさまりきらないものがあつたのだと思います。

ところがです。歌ってみると、黒い鳥、黄色い鳥まではいいのですが、橙々色の鳥、桃色の鳥となると、俄然がぜんいそがしくなつてきます。その上、桃色の鳥では、「なぜなぜ桃色」か、「なぜなぜ桃色」か、わからなくなつてきました。歌はだんだん元氣がなくなつていきました。そしてそのうち、鳥はどこかへ飛んでいってしまいました。

今思うと、子どもの私が、この童謡を気に入つたのは、蜜柑をたくさん食べると指先が黄色くなるように、赤い実をたくさん食べれば赤い鳥になり、白い実をたくさん食べれば白い鳥になり、青い実をたくさん

食べれば青い鳥になるんだろうという子どもらしい直接的な理解からだったと思えます。それに加えて、「なぜなぜ赤い」——「赤い実を食べた」と、問いと答えて言い切られているのが、より説得的に効ない心に響いたのでしょう。きっと小さい私は、鸚鵡がうむのようなきれいな鳥は、いろいろな色の実を食べ、あんなに美しくなつたのだと理解していたことでしょう。

秋が深まりゆくとともに、木の実、草の実、しだいに鮮かに色づいていきます。林檎、柿、梨、桃などの秋果も楽しみですが、美しい木の实、草の実も、すてきな目の御馳走です。鳥たちだけに、いろいろな美しい実を食べられてしまつては残念です。負けずに、秋の宝石のようなとりどりの実を染しもうではありませんか。自然界では、赤い実が一番多いためでしょうか、その目立つ色のためでしょうか、

赤い実が一番よく目につきます。おもな赤い実がなる植物をあげてみましょう。梅うめ擬なま、常碧山楡じやうひやくさんじゆ子、莢蓮けいれん、椅い、木斛もくこく、くろがねくろがね、青木あおき、藪柑子やぶかんし、千両せんりやう、万両まんりやう、紅したんべに、蔓梅擬つるうめし、美男葛びなんかづら、花茗荷はなみやが、南天なんてん、万年まんねん、青などとたくさんあります。

これらのうち、万両、青木、梅擬、南天は白実をつける品種があります。

青い実の植物では、濃青色の実がなる沢さわ塞さい、青黒色の実の支那移南天しななうつなんてん、藍色の実の藪茗荷やぶみやが、それに、サファイア・ブルーの実をつける竜の鬚りゆうのひげなどがあります。

黒い実をつける植物では、鼠麴ねずみもち、犬黄いぬわう楊やう、楠くすのぎ、八手やちて、橄欖オリーブ、松扇まつあしなどがあります。ぬばたまぬばたまと言われて、活花やドライフラワーに使われます。

その他、変わった色のものといへば、黄橙色のピラカンサ、それに藤色の紫式部で

しょう。

実をつけるこれらの植物は、花々が咲きにぎわう初夏の頃、花をつけます。しかし、目立たない小さな花なうえ、青葉に隠れてひっそり咲くので、見過ごしてしまいます。花は散ります。そして、夏から秋へと向かう中で、秘かに静かに実は熟してゆきます。

冷やかな秋の深まりとともに、秋の花が終ります。やがて木の葉も落ち出します。そして木の枯れの淋しさが訪れます。ちょうどそのような時、淋しさを忘れさせるかのように、色とりどりの実が鮮かな姿を現わしはじめます。秋の寶石は、美しく、豊かに輝きわたるのです。

私には、三種類の好きな実があります。一つは、赤い実の山帰来さんきらいです。またの名を、さるとりいばらという蔓性のこの植物には、散形に、ひきしまった光沢のある赤

い実がぶらさがります。直径六、七センチメートルはある大きな一つ一つの粒はしっかりしていて、時間がたつてもとれません。臘脂ろうじ色味を帯びた落ちついた美しい赤い実は、クリスマスに活けても、お正月に活けても似合う、モダンで古雅な花材です。

私は山帰来という、この名前も大いに気に入っています。山の奥深くに生い育った植物という感じがしないでしょうか。また山帰来の葉は、関西では、かしわもちをつくるのに用いられているそうです。正月頃、関西に行つてぜひかしわもちを食べてみたいと思っています。

二つ目は、藤色の実の紫式部です。これも名前が何とゆかしいことでしょう。紫式部は日本の山野に自生している落葉低木です。この紫式部より小低木で、実もわずかに小さく、そのかわり緊密につく、同じように美しい紫色の実がなる小紫式部という

植物もあります。

源氏物語の作者、紫式部には、ただ一人の愛娘がいました。大式だいしき三位さんみという人です。この人は、お母さんのように物語作家としての才はありませんでした。しかし、お母さんより和歌の才がすぐれていたという事です。その大式三位に、

はるかなる もろこしまでも

行くものは

秋のねぎめの 心なりける

という歌があります。

涼しく澄んできた秋、深い眠りから気持ちよく目覚めた心地は、遙かな唐土たうど、今で言えば北歐、いやそれよりも遠い遠い世界へ心が誘われるようだという歌のようです。すがすがしい、何か一つを深く求めて旅するような、素直で力強い歌ではないでしょうか。藤紫という色は、永遠に何かを憶れてやまない青色と、女性的なやさしい赤みの色が感じられます。この藤紫色に輝

いた母子は、秋の林でどんなことを語り合  
うのでしょうか。

私が好きな三つ目の実は、サファイア・  
ブルーに輝く竜の鬚です。常緑宿根草であ  
るこの植物は、冬でもあおおおとして、細  
長い鬚のような葉を上げられています。こ  
の竜の鬚の青い実を知ったのは次のような  
ことからでした。

小高い青山墓地を散歩していた時のこと  
です。石屋さんから、おじいさんと、小学  
生二年位の孫の男の子が出てきました。お

じいさんは十五センチメートル位の竹をも

っています。二人は道のふちに茂っている

草むらをかきわけて、「そっちにたくさん

あるか？」——「ある、ある」と言い合っ

て、何かをとっています。そしてそれを竹

筒につめ、水鉄砲の要領で押して飛ばしま

した。私は何か青いものをつめ、青いもの

が飛んだように思い、驚きました。

二人が去った後、その草むらをかきわけ

て、のぞいてみました。するとそこには、  
外の葉からは信じられない位に美しい、ま

っ、青な実がたくさんなっていました。竜

は、宝物の玉をそうやって隠していたので

す。それは正月の松飾りがとれた冬休みだ

ったと思います。おじいさんが昔遊んだ竹

鉄砲を、松飾りのいらなくなつた竹でつく

り、孫にその遊び方を教えていたのでしょ

う。

それから、「草の実の おびただしきを

隠し持ち 事もなげなる 秋の庭かも」

(窪田空穂)という一首を知りました。私は  
すぐ、竜の鬚のことを思いうかべました。



フレibel『母の歌と愛撫の歌』

○ブリュウファール編 莊司雅子訳

○キリスト教保育連盟発行

キリスト教保育連盟が、連盟の創立九十年と、日本の幼稚園創設百年の記念出版として、フレibelの「母の歌と愛撫の歌」を刊行されたことは、実に意義深いことであると思う。この書物の日本語訳は、昭和九年に茅野蕭々氏が訳されて、岩波書店から出版されたものがあり、私は三十年も前から、欲しかったのに手に入らなかった。このたび、莊司雅子氏の新訳により、装丁も、図版も、原著のままに刊行されることをきいたとき、夢の中のできごとのような気がした。フレibelの詩とウンゲルの銅版画

より成るこの書物を、自分のものとして手にとることができるということは、実に、並々ならぬことである。

周知のように、フレibelの著作には、一八二六年に出版された「人の教育」(Menschenziehung 小原国芳訳 玉川大学出版局)があり、それによって彼の教育哲学を知ることができる。また、「恩物」は、フレibelの教具として、日本でも、明治の初めからよく知られていた。フレibelのもうひとつの大きな功績は、この「母の歌と愛撫の歌」である。「家庭のための本」と副題がつけられて、母性教育のためのものでもあるが、詩と銅版画より成るので、時代を超えて、見る人の誰をも魅きつけずにおられないものである。原著は一八四四年に出版され、フレibel晩年の著作であ

る。表紙には、両腕に女の子と男の子を胸に抱きかかえた母親の像と、男性としての力と威厳をもってその子らを導く父親の像が描かれ、扉には「Mutter-Spiel und Koselieder 母の遊戯と愛撫の歌」の題名を配して、家族の団欒から、少年少女へと育ちゆく姿が、天に伸びる樹木になぞらえて描かれている。そこには、フレibelがああ自伝の中で、象徴的に述べている、垣根の向う側に咲いているのを憧憬をもって眺めていた、ああ百合の花も描かれている。その百合の花は、フレibelにとって、幼児教育そのものではなかったかと私は想像している。

今回の新版の訳者である莊司雅子氏は、フレibel研究者として日本の幼児教育界に大きな功績のある方であるが、この新版の終りに付けられた「本書の読

者へ」という文章の中で、「私のフレイベル研究の情熱を最初に燃やしたのは、実に茅野蕭々訳のこの『母の歌と愛撫の歌』でありました」と述べておられる。

先生の幼児教育研究者としての生涯の出发点に、この書物に対する感動の日々があったことを知り、感銘を新たにさせられた。フレイベルの華生の著作は、ここに最もふさわしい訳者を得られたのであると思う。キリスト教保育連盟が五年前からこの記念出版の計画をなされ、G・E・キュックリッヒ、三好浪江、佐藤初重の三氏によって、この記念事業が推進されたとのことである。いま、この記念出版の刊行を見て、心からお祝いする次第である。

この書物に私が初めて接したのは、終戦直後、私が学生だったときの、岡部弥

太郎先生の幼児教育演習だった。僅か数人の学生がテーブルを囲んで、薄暗い図書館の演習室で行なわれたその当時は、決して面白いとは言えない授業だった。

しかし、先生の立派な口髯と共に、不思議といくつか忘れ難い記憶がある。祖国を失って、なお幼児教育に祖国復興の希望を託したコメニウスのこと、英国のマクミラン姉妹のこと、それから茅野蕭々氏訳のフレイベル「母の歌と愛撫の歌」

を、ある日、持ってきて見せて頂いたことは、鮮明な記憶のひとつである。いまだ幼いころ、純粋に教育精神を論ずることができた時代であった。茅野蕭々氏訳のこの書物と一緒に、岡部先生から見せて頂いたのは、明治三十年にA・L・ハウ女史が、坂田幸三郎氏の協力により出版された日本訳である。これは周

知のように、ウンゲルの銅版画が、画も共に日本の風俗に翻訳された珍しいもので、世界中に、このような訳書は、他にないのでなかろうか。以来私は、保育史のことを話すときには、「母の歌と愛撫の歌」のこの二種類の書物を見せることを常としてきた。この書物を紹介させて頂くにあたり、私自身とのかかわりを述べさせて頂いた。

幼児教育を専攻しようとする方々が、このプルーファー編のフレイベルの原著の体裁のままの「母の歌と愛撫の歌」を、自分のものとして秘蔵しておかれることを、おすすめする。(発行所 キリスト教保育連盟、〒101 東京都新宿区中落合二ノ四ノ二、電・九五三一五一三六 定価一〇、〇〇〇円) (津守 真)



## 明日の保育を考える

親と子と保育者との出会いをめぐって

—クラス・デイの記録を通して—

小 泉 庸 子

はじめに

「明日の保育を考える」——子どもとの出会い——という視点を持って、私共の保育研究グループに於て、保育観察の記録を中心に、幼児と保育者が互いに影響を及ぼし関係しあい、互いに共感し、互いに成長して行くことなどを学んでいった。そして、この幼児をとりまく大人、親と保育者との出会いについても考察してみることにした。

親にとって子どもの入園は、子どもと同じく入園前と異なるいろいろな感情や経験を持つことである。子どもがその子なりの経験をし成長する背後に家族があり、成長を喜び助け受け入れている。この子どもを取りまく家族、主として両親と幼稚

園が互いに関係し合うことにより、この中で単に子どもの成長だけでなく、親も保育者も互いに成長しあう存在としてあるのではないか。この関係の深まりを親と保育者との出会いの中に見ることができないのではないか。

この出会いの場の一つとして我が園でクラス・デイと名づけている活動を考察してみようと思う。

クラス・デイについて

〈方法〉

親と保育者はいろいろな場で関係し合っているが、特に理解を深め合うためのプログラムとして、保育参観と懇談会をあわせて持つそのクラスの日、すなわちクラス・デイと名づけた。

この日、家族は都合のよい時間にお弁当を持参し参園する。そして子どもの遊びを見たり、共に活動し、子どもの生活にふれ、他の子ども名前を知ったり、親同志が知り合ったり、保育者との関係を深めたりする。この日、他のクラスは短縮保育とし、他のクラスの保育者も、親や子どもとの交りを持つよう、幼稚園全体がこの日は、そのクラスの日となるのである。

#### 〈プログラム〉

登園から十一時三十分まで子どもの普段の活動を親は見たり参加したりする。

十一時三十分、おべんとう。他のクラスの子らは降園、他のクラスの保育者もみんな一緒におべんとう。

十二時十分から一時三十分、親と保育者との懇談、子どもは遊び、他のクラスの保育者は、子ども係と懇談会に出る係とに分かれる。

#### 〈懇談内容や形式について〉

クラス毎にテーマを持ち、クラス担任や親から発題し、問題提起をし懇談を始める。懇談はクラス全体で行なったり、グループに分かれて行なったりした。また、懇談の前又は後に、担任より子どもたちの園生活のようすや記録などを報告する。

#### 〈テーマ〉 今まで行なったもの

#### 三歳児クラス

- 。三年保育の中での成長をみる
- 。子ども・親・保育者の出会い
- 。友だちと出会って行く過程
- 。三歳児に育つもの
- 。遊びとその人間関係

#### 男の子の遊び、女の子の遊び

#### 四歳児クラス

- 。子どもと遊び——友だち関係
  - 。ことば——自分を表現する
  - 。友だちの広がり——四歳のグループ
  - 。友だちを受け入れること
  - 。家庭に於ける子ども様と幼稚園に於ける子ども様子の様子
- #### 五歳児クラス

#### 子どもとは

- 。二年・三年間の幼稚園生活をふりかえって
- 。子どもの独立について
- 。もう一度子どもの成長をみる
- 。子どもを取りまく環境について
- 。一年生を前にして

親と保育者との出会い——クラス・デイの記録とそ

の中で学んだこと——

一、親が我が子を再発見する時となる——三歳児S夫の母のことば「子どもの遊びはめまぐるしく変わる。家だと一人っ子だから飛び廻ったり、跳ね廻ったりする姿は想像できなかった」

二、親が自分の子以外の子について再発見する時となる——四歳児R夫の母「Tちゃんとても遊びが上手で友だちのめんどう見がいいですね」

三、親が自分自身を見なおす時——五歳児T子の母「今、自分は、自分の母と同じように子どもをしかっている」

四、親同志が学びあい支えあう時——五歳児F子の母「外国の人はよく自分の子どもをほめることができるときくが、自分たちはなかなか子どものよいところが見つからないし、ほめることができない」という発言により、みんなで自分の子どもの良い点について考え紹介し合った。

五、幼稚園に対する疑問や不安や希望を出し合う時——四歳児R夫の母「先生たちから、子どもの気持ちを考え大切にすることを教えられた。しかし自由な遊びの時はいいのですが、一斉の時、全体の迷惑を考えなければいけないことを教えてほし

い。うちであまり怒るから、幼稚園でその反動としてああい行動に出るのだろうか」

六、保育者が子どもや親についてより理解が深まる時——五歳児M夫の母（テーマ子どもの独立について）「年少組の時からみて、年長組になった今はずいぶん成長していると思う。親を信じきって親から離れて行くことができているのではないかと思う反面、先をきって離れて行くかも知れない。自分から離れて行く時、気も動転して泣けて来るのではないかと思う。でもその時笑って見守ってやれる親になりたい」

七、保育者が親に支えられ教えられる時——四歳児K夫の母「幼稚園では、子どもをあるべき姿に導いてくれることがよくわかる。成長の段階によって子どもの話の中に出て来る友だちの名前が増えてくる。家にいる時は、特定の枠の中でしか遊べない。しかし、幼稚園ではその枠からはずれて、いろいろな人と出会えて、遊べて良い。先生が友だちと出会わせてくれる。今日、子どもが名前を言っていた人のお母さんに会えてとてもうれしい」

八、親が保育者に支えられ教えられる時——三歳児H夫の母「下に赤ちゃんが生まれたためか落ち着きなく、うるさくて困る」

その後いろいろ話し合った後、担任より保育記録メモを通して子どもの活動を報告した。これを見てH夫の母「いろいろ考え、集中力があるんですね、家に居ても空箱とセロテープで工夫して作ったりするんです。アイデアがおもしろいです。創造力が豊かです」と自分の子どもを肯定的見方から肯定的に見ることができた。

九、子どもに大人が教えられる時——四歳児S夫の母「S夫が言うには、幼稚園には強い人がいる。僕は強い人がまんしていると楽しく遊べるんだよ」と園生活を報告しています。親としてこれをどう受け止めて行ったら良いのかとまどっています——このS夫が提起した問題については、保育のあり方に関する問題が含まれていると、母も保育者も受け止めたが、この発言の時は、懇談の内容として全体に広げなかった。

十、保育者が、他のクラスのことについてより理解を深める時——前九の事例などを通して、保育内容について、子どもの感じ方、等について話し合いを行ない、学ぶことが多かった。

年齢別に親の発言の傾向を記録の中に見ると、三歳児クラスは、子どもそれぞれの活動や個性や成長の違いなどをその子どもそのままの姿として受け止め受け入れて見て行こうとする姿

勢が多く見受けられた。この理由としては、三歳児のクラスは比較的人数も少なく（十名―十六名）また、三年保育に入園を希望する親の意識のレベル、又、まだ三歳で小学校という枠に入る生活にはまだ時間がある等の考えもあるようである。

四歳児クラスは、三年保育から上がった子どもと新入園児との混合クラスであるが、親自身の葛藤か、四歳になると一般的に幼稚園に入れるという考えなどからか、他の子どもと比較したり、具体的、個人的な自分の子どもの問題により多く目がむけられているようであり、幼稚園の方針に対する疑問、不満、無理解等も出される。（幼稚園で遊ばせてばかりいるとか、○幼稚園では字や英語を教えているのにとか、五十音を教えてほしい、スモックを着用してほしい等々）

五歳児クラスは、すでに親同志も二年目、三年目と子どもや幼稚園を通して関係ができていたためか、懇談の問題点をしぼり、親同志の学び合い支え合いなどがスムーズに行なわれる。そして、親同志が具体的に問題の対処の仕方、申し合わせ事項などを作り出して行った。その例として、○親と子の自転車の乗り方十のやくそく、○お小使いについて、与え方、○子どもが互いに他の家遊びに行った時のおやつとの与え方、遊び、かたづけ、帰宅時刻等の申し合わせ、○テレビの見方、等々、親

としての取るべき態度、姿勢等をクラスの方向約束等として申し合わせたりした。

一親として、一番目の子どもと二番目の子どもに対する気持ちの違いに気が付き、他の親に対しても自分の経験などを話して力になり合ったりしている。特に一番目の子どもの時は、子どもの受け止め方なども、不安定で、あせりなども見られるが、二番目、三番目の子どもの時になると、成長への見通しがもてる、などに変わって行っている。例として、小学校入学準備、文字の習得についてとか、幼稚園での活動、あそびの受け止め方等についても、子どもの可能性を信じ待つことを、親からの発言等は最初の子どもの親にとっては、納得しやすいようである。

保育者としては、親の子どもに対する思い、経験、見方、受け止め方、悩み等を知り、保育に立つとき、より近くに子どもを感じ、より深く、子どもと共感できたりする。保育者は、自分の子どもを出産したり育てたりした経験のない者が多く、親の子どもに対する鋭い直観や、深い思い、願いの中に子どもの成長を支え助けるものがあることを学んだ。

## 今後の方向について

世界的傾向として、家庭教育より施設教育依存が強まっている中で、親も、保育者も、子どもをよりよく知るためのプログラムの作成とその展開、実践、検討が必要であると思う。また、保育者は、親の持つ直観や、深い思い願いを理解し受け入れることができるゆとりをもつことができる力の貯えが必要であると思う。

## 終りに

幼稚園は、子どものことのみにとどまらず、親と保育者との関係を深め、出会うことを求めて行く時に、互いに認め合い、受け入れ合い支え合うことは、親は親として、保育者は保育者として、それぞれよりよき明日への歩みを進めることができることを学んだ。そして、この両者の歩み、成長、共感、支え合いに変わって行く出会いは、子どもによって実現し、子どもの明日を生きる支えともなることと思う。

(東奥義塾幼稚園)

〔史料紹介〕

渡部平太夫・渡部勝之助

『桑名日記・柏崎日記』(その三)

松川 由紀子

一八四五年三月一日(鎌之助九歳)

手習休日に付鎌之助隣の熊市と釣に行

一つも釣らず帰ったげな。

同年四月二十二日

鎌の単物片付ると一寸見た処、襟方の  
処五寸程破れ、脇の下切のついてある所よ  
り八寸程引裂あり、お婆もびっくり致し、  
是は又何したことじゃ情ないことを仕おっ  
たぞ。昨日のばん衾を着やれと云たら、つ  
いぞない事アイと辺事して直に内へ来て着  
替た様子、なぜ破たら破れた御免なさの  
あやまらずかくしておいた憎いやつ、どふ  
して破たと問詰められ、無恥白状いたすに  
は、きのふ鬼事をして誰とかさがつかまり  
なった時破れたと云。ズブトイには困り  
てる。

同年七月二十七日

この問より留五郎と約束のよし、鎌之

助、横村藤助、留五郎についてはぜ釣に

行、初めてわらじばきにて行、気がせわし

き故、きやん／＼鳴りつけて大騒動、釣竿

は八幡瀬古にて廿八文にて買ふて貰ひしよ

し。弁当飯を握るやら、ビク腰に付てや

り、蛤を切刃物をくれと云、漸皆拵ひ出来

出て行。

同年九月二十一日

鎌之助手習より帰り子供同志初音とり

行。たつた四本とつて来たげな。

同年十月二十日

鎌之助早く目覚し小用に起、直に着物を

きせ本説に行。……無程鎌帰る。今日は見

合てくれと先生が出て来て云ひなざるから

帰てきたと云。

同年十月二十九日

鎌暮相に勝助、銀太、加納兄弟をつれて

きて席書するから、墨をすれの紙出してく

れと大騒。半紙に一字づつ書く。郡の縫次

郎の処へ見て貰ひに行。鎌は西の一にな

り、皆紙を取てくる。鎌は山の字一枚、寿

字一枚也。

同年十一月八日

鎌之助今になつても百人一首を知らぬ

と、歌かるたを取ることがならぬと云たれ

ば、そんなら教へてくんなへ、おばや百人

一首の本を出してくれやいと、やん／＼い

ふ故、おなか本を出してやるとサア教へて

くんなへと云故教てやる。十五六今日中に

覚る也。

同年十二月二十一日（鎌之助十歳）

お婆云にはお爺さま大が、い風もよふなつた様だから御湯へ行ておいでなさいましといへば、鎌おじめさ行なんナととめる。イヤもふ入つてもよかるふて、鎌よくないてひよつと悪くなりなつて死ぬると大変だ、このゑう内を置て、柏崎のびんぼう内へ行ンければならんから行なんナと云故、皆々おかしがり大笑也。七ツ八ツは悪たれ盛りにも云ども、この節猶にくまれ口をきく。あくれる故お婆も持てあます。おなかなどにも云には、全体妹に云様な塩梅、そんなずるゐこと云からかまわぬとおなかゞ云ば、湧出す様しやべり中くおなかなどにちつとも負けずにしやべるやらたくやら、するとアレ鎌がいけんぜとおなか云故、お婆腹立又そふ云なんぞと云と、アレいけんぜく聞たくもなへと云跡から、アレ又いけんぜと云。

一八四六年五月二十二日

鎌之助一昨日頃より子供同志綱すきはじめ、稻倉へ昼より持て行。昨日は内の二階に集りすく。今日は御代田へ持て行。綱な

ど決してすくには及ばぬから、手習と書物に精出して習はにやならぬと云ば、皆子供がする故、おれもすきたくてならぬ、稲畑買ふのにするから、すかせてくんなへと云故、致し方なし。

同年十月五日

鎌 新矢田へ本読に行候処、鍵がかつて留守だとして帰る。

一八四七年二月二日（鎌之助十一歳）

旧冬より御家中も町方もこま廻し大流行にて、鎌もこま廻し大分習ひ、チョイト懸とてこまを手を取それより紐へうつし、横にしてひやふ三やよ五や六七八九十と昨夕方に鎌百九十八にて落し、あと二つで二百懸る処をおとしたと残念がる。上手な子供は三百も四百も懸る。二百程も懸るとこまに勢つき、ズンく首出し候よし。その外曲廻しをする子供も有之候よし。

同年八月六日

愛宕の風呂へ若い者入りに行候に付、鎌之助も手習より帰り行候よし。

同年十月二十四日

鎌之助徳治と茶わんぶせに行。暮合に帰る。二合斗とつてくる。

一八四八年一月十一日（鎌之助十二歳）

鎌裏にて武者風揚る。……今夜鎌之助横村へテツコ振に行。鼻紙持てゆく。四五十枚持て行、七八十枚持て帰り候様子也。

柏崎日記より

一八三九年八月十八日（お禄五か月）

七ツ過交代帰宅の処、お菊部屋に泣て居り候に付、御状に何か悲しき事でもと申せば、そんな事はないけれど、鎌子に逢ひ度てくならんと申候て、泪こぼし居り候に付、私申候にそんな馬鹿な事不忠に、早くめしに致せと申候へば、漸々立出御膳立にかゝり申候。

同年八月二十二日

小女大分手利いて参り、何ぞあづけておけば、余程ひとり遊び致し候。しかし未だ這ふことも出来不申。のめつて居り申候。

同年十月一日

ろく昼過より熱出時々晩鳴き出し困り入申候。兎角目宜敷なく、直ると又わるくなり此頃は又赤んべいになり困入候。そのせいで虫ねつにて可有之、と被存候。

同年十月十九日

小女宵の一ねりは寢候へども、夫より何様に致し候ても、だゞ起し聞不申、はだかにして抱てねると、ぐうとも不言眠り申候。それ故毎晩私に抱ててくれと申には困り入申候。しつこの時は目覚泣く故、やればする故不調法はあまりなし。

同年十月二十五日

小女兩三日以前よりちよちよち教ひ候処、よく覚ひ申候、是も鎌子と同様きせる好きにて、きせるを持せて置ば、余念なくなめて居り候へども、あぶなき故じきに取上げれば、気げんわるし。

同年十月三十一日

お六この間はお六も覚ひ、気が向けばよく致し申候。厚着故はい出し不申、氣に入たる持遊びがあれば、余程ひとり遊び致し申候。短日故昼寝は少々つつ二度、夜

は毎晩五ツ頃迄、起て居り申候。

同年十一月十五日

小女食ひ初め未だ致不申候に付、今日真似方仕り候。竹内の衆不残お呼び仕り候。山崎は親類忌中に付呼び不申、酒の肴は大根とはたはたの煮付一鉢、かぼちゃ一鉢香の物メ三品也。膳部は平のつべい皿はたはた二つづ、汁豆ふ小豆めし右の通り也。四ツ半頃迄皆様お咄し也。小女この頃はかゝを見るところと申し候。形り斗り大きくて未だ這ひ不申、後へずり下る斗り也。

同年十一月十九日

小女守りに抱せて洗湯へ参り申候。小女大悦び是も湯好きにて仕合に御座候。

同年十一月二十日

小女におまんぢう一つ預け候処大悦び、ぐずもみに致し離し不申候。毎晩五ツ迄は起て居り困り候。

同年十一月二十七日

小女にぎやかな所悦び、竹内にて上きげん、叔母さ行燈を破らせて大悦びに御座候。

同年十二月八日

今日ろく竹内にてちりげへ灸を五つすえて貰ひ申候。この頃は齒が生ひ、香の物挿喰ひかき申候。

同年十二月十六日

七ツ過迄小女兎角熱有之、今日は乳も余り給はず、だゞ起し困り入申候。……小女寝ると泣き出し、どうしてもだまらず、起て抱て居ればよく眠り申候。

同年十二月十七日

小女今朝はおとなしく、少しは元氣も出遊び申候。宵の内だだ起し候に付、救命丸一粒為吞候処、夫よりおとなしく眠り申候。

同年十二月十八日

小女大いに宜しく候へども、暮合淋しき故泣出し申候に付、竹内へつれて参り候。

同年十二月三十一日

小女にも本膳をすひ申候処、両手振り立大悦び、少々油断の内膳引寄せ、飯わんひつくり返し、まゝ顔へぬり付嬉しがり申候。

一八四〇年一月五日



お菊毎日御つかわし下されし御状日記、

くり返し／＼拝見致して居り、鏝こに逢ひたがりくどき居り申候。御向の衆不残子供好にて、ろく大可愛がり、竹内へばかり一日何十べんとなり参り候。

同年一月三十日

お六そろそろ這い出し申候。とかく目よろしからず困り入申候。先日豆腐売が見て、自灸治上手の者有之よし知らせてくれ候。是が中浜の番太のかか也。これへ参り灸点おろしてもらひ、背中へ毎日七日の間一つづつすゑてやり候。今朝までにて一廻り相済申候。昨日昼吉田より状届けられ早速披見仕、先々御機嫌にて御越歳遊大安心仕候。不相替日記細く御認、その上鐘児の手形せいの高さ手足の太さまで御つかわし被下置、誠に誠に難有奉存候。さてこなたにて思ひ候には大違にて大造に太り、せいも高く手の平も大きく誠に驚入申候。右の所お菊手に取つく／＼眺め又々恋しく相成り候様子にて涙こぼし居り申候。

同年二月二十日

ろく先日より顔に吹出物いたし、次第に

ふえてまいり、地ばれも少しいたし、かゆがり困り入申候。今日海津祐真と申医者に來て見てくれる様状つかわし、見てもらい候処、全く胎毒のよし、つむりにも少見へ候。つむりへ沢山出るやうになれば、顔の出来物引いて仕舞間丸薬を二三粒づつ飲ませるやう申候。

同年二月二十九日

金子よりはだか人形祝つてまいる。初節句は不致、内裏ばかり机の上にも飾り置くつもり候。御向いの衆おききいれなし。叔母さ明日は、おれが飾つてやるとて、今日お向いの雛良きところばかり運んで置被成、小内裏一対、はやし方五つ、かむる三つ、ぜんわん小道具色々屏風毛せんまで御持参なり。隣の荒井より小はま弓三はり祝うて来る。当所は雛人形などは一切無之。江戸より皆取り寄せ候ことなり。

同年四月二十五日（お禄一歳）

お六このごろは折々二足三足、つづ歩き初め候。もの言ふこと出来不申むまむま、はあ斗也。きのふお向へ参り居り、着物をま

くり、二本指で何かつまむ真似いたしては口へ入、度々するゆへ、この子は猿がのみ取様なことをすると思ひ、皆々不思議千萬、よくよく考へ候へば、しらみ取る真似也。守女使の出先や、守りに行き何処となくつれて参り候故、誰かしらみ取るのを見覚てきたか、但し守がどこかで取るのを覚ひ候やら先是に違ひなく、みなみな不思議又大笑也。何でも見ると真似いたし候。六もひようげものになると見へ申候。

同年五月四日

小女自分の枕を見ると胸に抱き、ねんねんころころの真似いたし、中々こしやくなものに御座候。

同年六月六日

小女今朝御向へ参り候処、民女竹の皮に梅干入なめて居り候所ろく見付、よこせと追っかけ、民坊はやらんという、大げんかにて、六にも別にこしろふて被遣候所、漸きさん直り、それよりなめなめするうち、梅干つぶれすっぱくなり顔しかめほり捨て仕舞候よし。叔母さのおはなし也。中々こしやくになり候へども、まだ一向に口きか

れず、かかも出来不申候。只ねんねと、ばア、むまむま斗也。神棚へ向ひ時宜はよくいたし候。その仕かたは手を合せ暫く立つて居り、顔に両手を当て前へのめり候ての御時宜なり、一本まいれも出来候へども、知らぬ人の前にては、恥しいやら不致。

同年六月十一日

お六兩三日よく歩き、もう這ふことは止めにしたし候。夫でも極急ぐ時は這ひ付申候。今日も巨燵やぐらの上に独りで上り、高いたかい致し又ひとり下り候。

同年六月十七日

小女今日は下へ下りやうと申て不聞。草履を結びつけて出し候へば、誠に大悦び、生れて始めての事故面白くてならんと見へたり。先下すと内の前より堀江の前辺を、二丁斗の所、休みなしに飛んで参り候よし、夫よりやつとだましつれて帰り、内へ上げたれば大だだおこし候。

同年六月十九日

小女二三日名を呼ぶと返事いたし候。かかといふことも出来申候。

同年六月二十一日

ろく行水を面白がり、いつまでも上るまへといふには困り入申候。

同年七月一日

例年の通り陣屋の子供麦わらにて船こしらひ七夕送りと唱ひ、今晚より笛太鼓にて、陣屋中囃立さわぎ申候。盆の様に提燈つけて歩行申候。おろくもお向より赤ひ提燈御貰ひ申候にて、守と遊びに出大悦びいたし五ッ過帰申候。お菊も大分よろしく候へども起きて居兼一日寝通也。柏崎ふさわぬかよわへには困り入候。

同年八月七日

おろく悪ひことするは、なかなか一通の事にてはなし、少し油断すると水瓶の水は汲み出し、板の間中水だらけ、湯殿へ行水鉢の水あたまたから、あびるやら、はだして庭へ降りるやら、くどの灰はつかみ出す。灰吹は置へこぼすやら、か様な女の子もあるものかとあきれ申候。しかし薬三まいするよりましかと申居候。

同年同年九月六日

おろく水がめの中に真つ逆さに落る、足先の斗に見ゆる、お菊うろたへて上る、水

も不呑何の事もなし。

同年十月二十八日

お六このごろは大分口が廻り、ちやちや、かゝ、おぼぶ、しょんべ、うんこ、まめ、とゝ、その多いいろいろ片ことは出来申候。

同年十一月十五日

大工勇藏参り雪囲ひを付て呉れ候。今日は鎌之助の祝ひの心持にて、小豆めしに、いも、とうふのくず煮いたし、お向の叔母様、民女呼び申候。桑名にても定て御祝ひ被成下、この節は鎌之助元氣を出してさわぎ付て居るだろふと申し出し居り申候。夜分は豆多りが出来、お向の衆不残勇藏もはなして居り申候。

同年十二月十五日

この頃はおろく大分口廻り、守女おゆきのことを、お多ちといふ、御向の運公守にかゝり合来年は大方よい聿を取るだろふ、お多ちむまいなア、むまいなアと被申候を覚て居り、今日昼めしの時分、守の顔を見詰て、お多ちむまいなアといふ。誠に皆大笑ひいたし候。どうかするとおとつさとい

ふことも御座候。八月ごろより、しよばよくわきまひ、不調法いたすこと絶てなし、おきく仕合とよろこび候。

一八四一年三月九日

笠はり、お六達者になり、お菊の草履下駄まで引かけ、ばたりばたり出かけ申候。次第に越後言葉能覚ひ、大笑ひのこと度々御座候。イツチよく申ことはモダアといふこと也。おろくこれは誰んだと申セバ、おれんダモダア、又アチチスエンカといふとイヤダモダア、何でも後へモダア付るを面白がり、みんながかりあふ。毎日守りと町へ行遊んでまいる故、おのづと越後者になり申候。

同年三月十八日

この節八重桜さかり、おろく余程歩き、道々すみれの花を折り大悦び也。

同年三月二十日（お禄二歳）

越後者はまることをとぶる又はとびると申、お六よく覚ひ、外で水たまりへはまり足をよごして、カ、トビッタゼと申、お菊越後言葉聞くもいまいまして申し候へ共、六の覚ひるには是非もなし。

同年五月二十一日

……一人でよく遊びに出、近所の子供と竹の皮に梅干入てなめて遊ぶ、時々おつかちち一ばへのまふと外から申て帰り候。ちち大好にて一向ままを食、べず、その外食物はねだりなし。

同年五月二十九日

帰り候ところお六、お菊に抱かれてうなつている。昼前に腹が痛へと申帰り申候。それはくわくらんにてもあるべしと申て、昼飯を食べている内、ウンコにゆかふと申、つれて参り候へども通じなし、その内もがき出し、だかれてみたり寝たりころげたり、大きに苦しそふ也。一声大うなりすると、目をしつかり閉ち歯をくひしめ請答なし。お菊大変だ来て見やれと申、守りに御帳部屋へ救命丸をもらひに遣す。お向へ申と皆々おいで、これは大変大変にて熊の胆を持てきてとへて口へつき込むと気が付。医者所へも部屋者飛ばせる。しばらくする内少し通じもあり痛みも大分よろしく、乳をたべ申候。みなみな大悦誠に荒きもぬかれ候。医者も参り、もはや案事被

成候ことなしと申し丸薬を置いて帰り候。別にこな薬を遣し候間とりに遣せと申候故、

又部屋者に取りに遣す。早速取てまいる。水あめを買ふてそれに交せて飲ませる。少したつとしたか吐き申す。それより大いによろしくなり申候。

同年九月九日

おろく極縞の洗濯綿入を着せ鐙の常をしめてやる。誠に大悦髪を多つてくんなへとねだる。いつもの通りびんこ少しづつ摘み寄せ、真中で結び付てやる。前から見ればまげがあり、後ろから見ればびんこばかりにて、いよいよひようげきつた風付也。

同年九月十四日

おろくこの頃は守りもいらす、ひとりでお向今日極楽寺にて、おてふさの施餓鬼を被成候。八ツ前より御参詣なり、おきくも無抛おろくつれて参詣いたし候。おきく着物が悪くその上半えりそで口等も未だ着替致し不申、誠にいやがり、頭痛やみや

同年十月十一日

お向今日極楽寺にて、おてふさの施餓鬼を被成候。八ツ前より御参詣なり、おきくも無抛おろくつれて参詣いたし候。おきく着物が悪くその上半えりそで口等も未だ着替致し不申、誠にいやがり、頭痛やみや

み出て参り候。おろくの着物鐘児のおふるは未出来不申、青梅の着物着せて行。小さくなり甚見苦敷候へども、お六大悦おどり上り参り候。

同年十一月二日

お六朝起ると寝るまで、背中に枕負ひ昼寝する時も負んでいたし候。この頃もう道悪くどこへも出られず、一日火燵の廻りにて、ねんねさまごとには困り候。

同年十二月二十四日

明番より帰る。お六待ちかね抱かれてあたる。いろいろ話をする。てまり歌じじはばのむかしも所々おぼへて語り候。

同年十二月二十九日

お六せんだく着物きかへ、膳に向ひ何もかもよく食べ、お酒を少したべ赤くなり、いろいろどうげ口を聞く。おれは四つあんちやんは七つお民さは八つおたよきは九つになりなつたとこの間より教ふるられ、覚て咄しいたし候。そんならおつかさはいくつと申せば、じつと考へ居り、申にはおかつさは三つ、おとつきはと申せば、なつてもらちがなへがいと申、誠に大笑いたし候。

何ぞ取てきやれの、持てきやれと申しても見へぬ時には、なつてもらちがなへがいと申すこと近頃のくせにて、皆々かかり合ひ候。

一八四二年二月十三日

暮合よりお向の衆不残日記を聞きに御出被成候ところ、おかしき所大笑腹筋より候。五ツ頃までに読仕廻ふ。お六起て居り、所々ききつけとも笑ひいたし候。その内にもアンチはおばのおかんこクチャへという所をよく覚ひ申候。先頃おゆきの参りおり候時、だかれており、かいてかいてと申、どこでござりますと申ても言はず、只かいてかいてと、背中でござりますかと申せば、いゝや、おゆきの耳のそばで口をつけ、おかんこがかへでと申、おゆきころげて笑ひ申候。丁度鎌こと符合いたし候。

同年三月五日

お六申には極楽寺の花がさへたからおとつさ見にゆきなんかとねだりぬく。つくし沢山取つてくる。

同年三月十九日（お禄三歳）

今日はお六の誕生日故赤のまんまに豆腐汁が出来申候。

同年三月二十二日

お六洗湯へ入れんとするとイヤダ、イヤダ、イヤダと申て不聞。そんなら腰湯ばかりしなざるかと申、漸々承知致し上り段にて腰湯いたしくれ候。その内私共はゆるゆる入り申候。女の子のおく病には困り候。

同年四月十一日（真吾出生）

明け方より又こわり出し候へども、とかく生れそふと申程の痛みでなし、度々湯づけの薬の汁のとのませ候。叔母さの思付にて人参をせんじて飲ませると、内より持ておくれ被成、それをせんじ飲ませ間もなく大虫もこわらず安産致し男子出生候。五ツ半過頃也。みなみな大安堵その上女子のつもりに御座候ところ男子にて別して大悦仕候。お菊、お六産み候節ちとたつきの気味有之候故、要心いたし早速酢と火を入れてかがせ、安神散を飲ませ候ところ、甚元氣よろしく、その内に追々聞付飲にかみさん達参りくれ候。お六婦り何事やらんと泣き出、ちと騒がしく有之候ところ、お

菊ちとふさがり汗出口びる色変り候故、大  
きにたまげ又酔の薬のとみなみな世話いた  
し被下、医者への迎にも遣し大分開き候内医  
者参り丸薬飲ませ少し立内気分しつかりい  
たし医者脈を取り、もふ御氣遣ひなしと  
申。その内栗本より二尺五寸ばかりの大鯛  
祝つて参りいわしを買ひ、取り合ひず酒を  
出し、鯛の潮煮致し医者にも振舞申候。屈  
は運公に願出候。生れ子湯をつかはせ掃除  
相済申候。目大きく鼻筋通り中高にて鏡に  
そつくりだと申候。お六よりはきりやうよ  
しなり。

同年六月十四日

真吾一兩日ちと笑ひ出し、大小便共やる  
度に致し、二三日はむつきさつばりよごし  
不申。

同年七月十五日

明方より小僧目をさましぐずぐずと申て  
お菊の胸をふみ困り、行燈つけてくれと申  
故枕の引出しより火打出し火を打行燈つけ  
ると大歡び笑ふやら語るやら、誠に上機嫌  
や。おきく少しはよけれどもとかく力不  
付、起て居りかね困り入候。

同年九月二十九日

木村に桑名咄いろいろ承り、鎌児の咄し  
も承り、それより日記とところどころ、面白  
い所読む。皆々あきれかへり、誠に桑名に  
お出で被成も同様実に眼に見ゆる様也と  
申、か様の日記は日本に稀なることなり。  
四年来一日も欠けずとは御氣根の程恐れ入  
りたること也と感心せぬ者は無之候。足  
立、真吾をさんざ抱く。にこにこ笑い、兄  
貴に生きうつし、これも大男になると見ゆ  
るなどとほめ申候。昨日真吾の手に墨をつ  
けて紙に押す。

同年十月二十三日

お六明け方より熱大きにさめ正気になり  
候。ほうそうらしきもの額に三つ四つ、口  
の端にも三つ四つ見へ候。……お六今朝よ  
りも余程数見へ候へども、目鼻の辺は一向  
少く、医者も参りくれ候よし。この分では  
格別のこととも有間敷由。(つづく)

(山口女子大学)

幼児の教育 第七十六卷第十一号

十一月号 © 定価二〇〇円

昭和五十二年十月二十五日 印刷

昭和五十二年十一月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

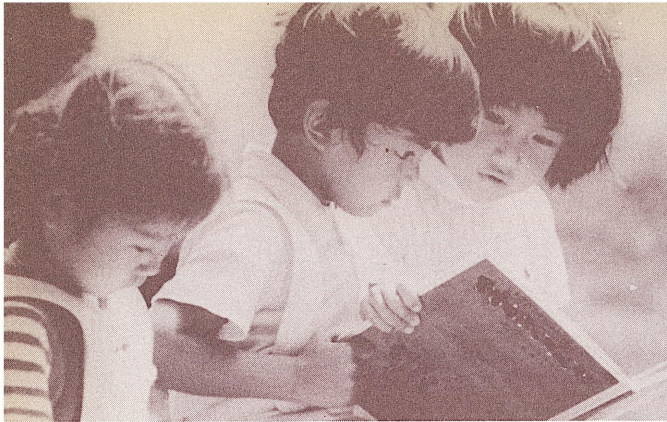
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

© 本誌御購読についての御注文は発売  
所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。





★キンダーおはなしえほん  
 の中で特に好評だった物  
 語を選んでいます。



第1集に続き、好評発売中!!

# キンダーおはなしえほん傑作選 第2集

園文庫や、保育室にお備えください。

全10冊 7,000円

L判・美麗ケース入り



1. さよならジャンボ
2. かぜのかみと こども
3. きたかぜのくれた テーブルかけ
4. げんこつやまの あかおに
5. なしうりと おじいさん
6. そうの はな
7. ともろこし どろぼう
8. ロンロンじいさんの どうぶつえん
9. わらの うし
10. あめだまをたべた ライオン

あわせてお備えください。

**第1集**  
 全10冊 7,000円

1. うりこひめとあまんじゃく
2. あざらしチック
3. こびとともおし
4. タオルおばけ
5. おりづるのうた
6. おにがわら
7. かしのきホテル
8. あんぱんまん
9. あいたたせんせい
10. 五つのはなのえき

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課TEL東京(03)292-7781代にお問い合わせください。

**フレーベル館**



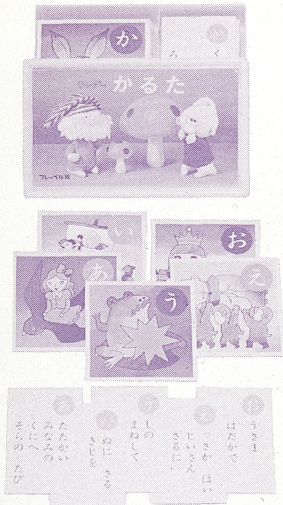
# キンダーかるた

ことばや文字をのりやり教えようとしても効果はありません。くりかえし遊ぶ中でひとりでのことばや文字が覚えれるよう工夫されたのが「キンダーかるた」です。

楽しい世界の童話

ゆかいななぞなぞ

生活習慣が身につく



## キンダーかるた ㊀

★プラスチックケース入り 250円

楽しい世界の童話がテーマです。情操を豊かにしつつ、ことばや文字への関心が一層深まります。

文・伊藤海彦 絵・祐泉 隆

## キンダーかるた ㊁

★プラスチックケース入り 250円

健康的でゆかいな、なぞなぞがテーマです。遊びながら、ことばや文字への関心が一層深まります。

文・前川康男 絵・平松尚樹

## キンダーかるた ㊂

★美麗紙ケース入り 200円

現代っ子の生活がテーマです。幼児の心を表現した文と絵で、いろいろな遊びと生活習慣を学びとれます。

文・稗田幸子 絵・高橋 透

新発売



かわいいカードで楽しさいっぱい

## 幼児トランプ

★87×57ミリ (54枚)

★プラスチックケース入り 250円

動物と果物のマークをくみあわせた楽しい幼児用トランプです。パズル抜き、神経衰弱、7ならべ等のトランプ遊びのほか、集合遊び、数遊び等の教材としても使えます。

絵・尾崎真吾